

日本ロシア文学会 第71回全国大会 筑波大学・オンライン大会 (2021年10月)

プレシンポジウム

消えゆく記憶と繋がり

—ソ連崩壊後30年の文学と社会を語る—

ソヴィエト連邦の記憶と新たな国民文学の生成

白山 利信

筑波大学人文社会系長・NipCA 実務責任者

文部科学省受託事業「日本留学促進のための海外ネットワーク機能強化事業
(CIS [中央アジア・コーカサス] 地域)」責任者

本プレシンポジウムは、コロナ禍の2021年10月29日に日本ロシア文学会第71回全国大会（筑波大学、オンライン）の開催校特別企画として、筑波大学「中央アジア・日本人材育成プロジェクト」が共催する形で、ロシア文学者・旧ソ連映画研究者で、当時筑波大学UIA(University International Administrator)の梶山祐治氏（現筑波大学国際局准教授）が中心となって構想し、実現したものである。

1991年12月に体制疲労を起こしていたソ連邦が歴史的偶然と必然の中で解体した結果、15の国家が独立を果たし、今年(2025)で34年目に入った。旧ソ連の様々な制度や機構は機能を完全停止し消失した。マルクス・レーニン主義の国家思想は否定され、社会主義革命以前の帝政ロシア時代、あるいはそれ以前の思想的・宗教的価値観、社会的価値観へと振り子のように揺り戻された。2025年3月現在、15の国々が独立国家としてそれぞれの国家建設と国家統合を果たし、ソ連という国が歴史と記憶の中のみの存在となった感がある。

文学は社会を映し出す鏡である。また人間の生(жизнь)の本質をリアルに再現する芸術の一つである。時代と社会の価値観は、人間の世界観に非常に大きな影響を及ぼす。しかし、人間の記憶に深くそして長く刻まれた価値観は、簡単に消えるものではない。特に1960年代、1970年代に生まれ、1970年代から1990年代に学校教育を受けた人びとにとって、ソヴィエト社会主義共和国連邦とその崩壊は、まさにそのような価値観の大転換の象徴であった。

今回のプレシンポジウムでは、7名の気鋭の文学研究者、すなわち、

- ①ロシア・タタールスタン出身の「カザンの作家」G. ヤーヒナの文学の魅力の核心を紹介し論じてくださった守屋愛先生¹、
- ②ベラルーシの言語状況と4人のベラルーシ現代作家の文学作品を紹介・考察された越野剛先生（慶應義塾大学文学部准教授）、
- ③ウクライナ文学の歴史的な位置づけと2つの異なる作家のタイプを分析された奈倉有里先生、
- ④内戦とロシアとの戦争という二重の苦悩を経験したジョージア社会や若者の閉塞感を描いた現代ジョージア文学作家A. モルチラゼとD. トゥラシビリの主要作品を紹介・分析された五月女颯先生（当時日本学術振興会特別研究員、現筑波大学人文社会系助教）、
- ⑤ドイツとソ連に翻弄された歴史を歩んだラトヴィアの4人の現代作家と詩人の作品に刻まれ言語化された自伝性と悲壮性という特性を紹介し浮き彫りにされた黒沢歩先生、
- ⑥歴史の変遷の中で捉えたウズベク文学の系譜とソ連崩壊後ウズベキスタンで起きているナショナリズムの文脈で国家政策と結びついたウズベク文学の現状について鋭く分析し概括された河原弥生先生（東京大学准教授）、
- ⑦カザフスタンの、19世紀までの口承文芸としてのカザフ文学とソヴィエト時代を含む近現代のカザフ文学の類型と、時代を超えて通底するカザフ民族の遊牧文化と伝統が守られていることを論じられた坂井弘紀先生（和光大学教授）は、

わずか10分間という限られた時間の中で、ソ連以前、ソ連時代、ソ連崩壊後の、価値観の大転換を反映した、それぞれの文学の動向と紹介した作品などの本質的特性を見事に言い当てている。そして、どの国の文学作品からも民族とその歴史に繋がる独自の色合いと共に発せられる人間の生きる苦悩、喜び、怒り、悲しみという普遍的な価値の表象と、時代と社会のリアルな「気分」と「映像」の表象が、新しい国家、社会、価値観の中で、ソ連邦という壮大な記憶の基層のプリズムを通して滲み出ているかのようである。文学とは、人間学の表象芸術である。故に、文学は、人間の生からいずる普遍的価値を保ちながら、豊かな個性を持って変幻自在に生成されてきたし、これからも生成され続けていく。わたしは、このプレシンポジウムを通じて、人間の生の営みがある限り、ソ連崩壊後の世界に新しい個性豊かな文学が生まれ続けるに違いないという確信と、これからも地球上のど

¹ 守屋愛「ズレイハをとりまく光：グゼリ・ヤーヒナ『ズレイハは目を開ける』の魅力」『Slavistika』（東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室年報），No.35, p. 405-417, 2020. を参照。

ここにおいても過去の記憶の繋がりを持った古く新しい文学が生まれ続けるのだという思いを抱いた。

このプレシンポのコメンテーターをされた貝澤哉先生（早稲田大学文学部教授）のコメントは、一つ一つの議論の急所を簡潔かつ明快に説明されていて、ポスト・ソヴィエト文学の醍醐味と着目すべき切り口が直に伝わってくる。オーガナイザーとして心からの謝意と敬意を表したい。

本プレシンポを構想し、司会から登壇者との調整に至るまでその他のすべてを行った梶山祐治氏のご尽力に対しても厚く御礼を申し上げたい。

今回は、日本ロシア文学会のプレシンポジウムとして、ロシア・タタールスタン、ペラルーシ、ウクライナ、ジョージア、ラトヴィア、ウズベキスタン、カザフスタンの、ソ連崩壊後の文学をメインテーマにした文学論を展開した。もしも可能であれば続編として、残りの8カ国、すなわち、モルドヴァ、アゼルバイジャン、アルメニア、リトアニア、エストニア、キルギス、トルクメニスタン、タジキスタンの文学についてもソ連崩壊後の動向を見つめ、議論する機会を設けてみたいと考えている。これまでロシア中心に語られがちだった旧ソ連諸国の文化については、その地域に立脚した視点から語り直す機運がますます高まっているからである。

以下は、登壇された先生方が、本プレシンポジウムの後に、出版された主要な著訳書である。是非とも購入され、ご一読いただきたい。

【著書】

梶山 祐治 著『ウクライナ映画完全ガイド ロシア帝国時代からマイダン革命以降の現代まで』（2024）パブリブ
五月女 颯 著『ジョージア近代文学のポストコロニアル・環境批評』（2023）成文社
奈倉 有里 著『夕暮れに夜明けの歌を 文学を探しにロシアに行く』（2021）イースト・プレス
奈倉 有里 著『アレクサンドル・ブローク 詩学と生涯』（2021）未知谷
奈倉 有里 著『ことばの白地図を歩く 翻訳と魔法のあいだ』（2023）創元社
奈倉 有里 著『文化の脱走兵』（2024）講談社
奈倉 有里 著『ロシア文学の教室』（2024）文春新書
イスラーム文化編集委員会 編（河原弥生 分担執筆「宗教施設」「建築（中央アジア）」）『イスラーム文化事典』（2023）丸善出版
小松 久男 編集代表、梅宮 坦、坂井 弘紀、林 俊雄、前田 弘毅、松田 孝一 編（河原 弥生 分担執筆「イスラーム化」「スーフィー教団」）『中央ユーラシア文化事典』（2023）丸善出版
石川 達夫 編著、貝澤 哉、奈倉 有里、西 成彦、前田 泉 著『ロシア・東欧の抵抗精神 抑圧・弾圧の中での言葉と文化』（2023）成文社

【訳書】

ユーリー・ノルシュテイン 著（鴻 英良、毛利 公美、守屋 愛 訳）『ユーリー・ノルシュテイン 文学と戦争を語る』（2024）ラピュタ新書
スパトラーナ・アレクシエーヴィチ 著（奈倉 有里 訳）『亜鉛の少年たち アフガン帰還兵の証言 増補版』（2022）岩波書店
オリガ・グレベンニク（奈倉 有里 監修、渡辺 麻土香訳）『戦争日記 一本の鉛筆で描いたウクライナのある家族の日々』（2022）河出書房新社
サーシャ・フィリペンコ（奈倉 有里 訳）『赤い十字』（2021）集英社
ヤーニス・ヨニェヴス（黒沢 歩 訳）『メタル' 94』（2021）作品社
エドガルス・カッタイス（黒沢 歩 訳）『一〇の国旗の下で 満州に行きたラトヴィア人』（2024）作品社

本書は、筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト」の助成を受けて刊行されたものである。日本財団の笹川陽平会長、森祐次常務理事、有川孝国際事業部長、勝俣創介国際事業部チームリーダー、同事業部の松尾雅子氏に対して、衷心より感謝申し上げます。

最後に、諸事情から本プレシンポの内容の刊行に約3年半の月日がかかってしまったことについて、登壇された関係者の先生方に深くお詫び申し上げます。

梶山 時間になりましたので、日本ロシア文学会プレシンポジウム「消えゆく記憶と繋がり ―ソ連崩壊後 30 年の文学と社会を語る―」を始めてまいります。進行を務めます筑波大学の梶山です。よろしくお願いいたします。

本イベントは、明日、明後日と開催されます「日本ロシア文学会 第 71 回全国大会 筑波大学・オンライン大会」のプレシンポジウムとなっています。プレシンポジウム自体も筑波大学との共催となっていますので、まず初めに開催協力校を代表して、本学人文社会系の白山利信教授にごあいさつさせていただきたいと思っております。白山先生、よろしくお願いいたします。

白山 ただ今ご紹介にあずかりました、筑波大学人文社会系教授の白山利信と申します。本日は金曜日のお忙しいなか、「日本ロシア文学会 第 71 回全国大会 筑波大学・オンライン大会 プレシンポジウム」にご参加くださり、誠にありがとうございます。

本日のプレシンポジウムは日本ロシア文学会と共に筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人人材育成プロジェクト」による主催でございます。2009 年に第 59 回大会を筑波大学で開催いたしまして、はや 12 年が経過いたしました。今回の大会は、本来ならば秋の香りと木々の彩り豊かな筑波キャンパスで盛大に実施する予定でしたが、昨年以降のコロナ禍が十分収束していないという状況を受けまして、2 年連続でオンラインによる開催となった次第です。とはいえ物理的なボーダーを超えた参加が可能になりまして、明日、あさっての研究発表では日本国内のみならず海外から、特にロシアから一流の研究者が参加する予定でございます。

本日のプレシンポジウムのタイトルは「消えゆく記憶と繋がり ―ソ連崩壊後 30 年の文学と社会を語る―」となっています。東西冷戦という言葉は既に死語となっていますが、現在 50 歳以上の世代の方々にとっては、東側陣営の名手として強大な権力と世界的な影響力を持ち、欧米列強諸国の西側陣営に鋭く対峙したソヴィエト社会主義共和国連邦が 1991 年 12 月にあまりにもあっさり解体してしまったことに、当時、非常に大きな驚きと衝撃を感じていたのではないかと思います。74 年間続いたソ連が 15 の国家に解体され、それぞれが新たな国家として独自に 30 年の歩みを重ねました。今日はソ連解体に伴って誕生した 15 カ国のうち七つの国の独立 30 年後の文学と社会をテーマに、7 名の気鋭の先生方によるご発表と討論が行われます。

このプレシンポジウムはロシア・ソヴィエト文学、ロシア・ソヴィエト映画、ロシア・ソヴィエト社会の伝統など、広い意味でのロシア・ソヴィエト文化との断絶と継承という観点から消えゆく記憶とは何か。すなわちソ連崩壊という社会的

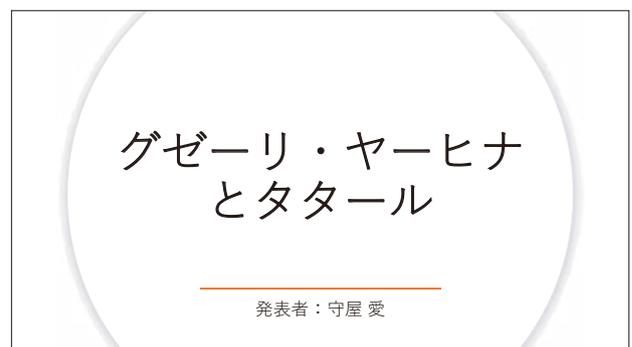
地殻変動によって旧ソ連の各国文学、文化、社会において何が断絶し失われたのか、また失われつつあるのか。残されたつながりとは何か。何が継承され残っているのか、あるいはこれからも残っていくのか。さらには何が新たに生まれ発展したのか、あるいは発展していないのかについて学び考えるという貴重な機会になると確信しています。私自身、本日のプレシンポジウムを本当に楽しみにしていますし、またわくわくしています。どうか最後までお聞き逃しなく楽しんでいただきたいと主催者として心から願っています。

以上、簡単ではございますが、主催組織を代表し、また大会実行委員会委員長としてのごあいさつとさせていただきます。それでは司会に戻します。お願いします。

梶山 白山先生、ありがとうございます。それでは早速、シンポジウムを進めてまいります。今日のシンポジウムは 2 部構成となっています。第一部「各国の最新文学事情報告」では 7 名の報告者に 1 人 10 分程度でそれぞれの国の文学事情をお話してもらいます。その後、第二部では「全体討論」として、モデレーターの貝澤先生に加わっていただき、全体討論に移ってまいります。

まず報告のトップバッターは、慶應義塾大学などで講師をされている守屋愛さんをお願いいたします。守屋さんはドヴラトフの翻訳などで知られていますが、実は最近、ロシアでも注目されているタタールスタン出身の作家、グゼーリ・ヤーヒナの小説の翻訳を準備されています。本日はこの作家を中心にお話ししていただく予定です。守屋さん、よろしくお願いいたします。

守屋 よろしくお願いします。私は「グゼーリ・ヤーヒナとタタール」というタイトルで発表させていただきます。皆さんもご存じとは思いますが、タタールstanはロシア連邦内の一共和国です。独立国家ではありません。そのため、今日発表される他の地域・民族とは大きく異なります。タタール共和国は、ロシア第三の都市カザンを首都としています。共和国の人口は 400 万人弱ですが、ロシア連邦内で最も多くの民族が共存している地域のひとつといえます。人口が 1 万人を超える民族だけでも、タタール人、ロシア人の他に、



チュヴァシ人、ウドムルト人、モルドバ人、マリ人、ウクライナ人、バシキール人がいます。2010年の国家統計では、多い順にタタール人が53.2%、ロシア人が39.7%、次いでチュヴァシ人がぐっと少なくなり3.1%と続いていきます。

公用語はロシア語とタタール語とされています。そのため、「タタールの文学」といっても一義的な定義があるわけではなく、純粋にタタール語で執筆された文学作品もあれば、タタール人が書いたロシア語など多言語での文学作品もありますし、もっと広くとらえれば、タタールの伝統のなかで育った人の文学作品もあります。さらにはタタールを題材にした文学作品ということもできるでしょう。今回の話で取り上げるグゼーリ・ヤーヒナはロシア語で執筆をしていますので、広い意味でタタールと深く関わる文学として取り上げることができます。

タタールスタン共和国作家同盟も、その存在を「タタールスタン共和国の領土に住み、文学的創作の分野の一つで積極的に活動し、タタール語もしくはその他の言語で執筆している市民たち、またはタタール文学に多大な貢献をもたらした共和国外に住む人々をまとめる公的組織である」と規定しています。グゼーリ・ヤーヒナもタタールスタン共和国作家同盟に所属しています。

これまでのロシア文学においても、この地域と関わりをもつ作家や詩人は多くいました。レフ・トルストイ、セルゲイ・アクサーコフ、マクシム・ゴーリキー、マリーナ・ツヴェターエワ、ワシリー・アクショノフなどの名前を挙げることができます。ですが、ロシア文学界の中央で、ヤーヒナほどタタールの世界を前面に押し出して、そのエキゾチックさで読者を魅了した作家はかつていなかったのではないかと思います。恐らくヤーヒナが活躍していなければ、今日、この会にタタールスタンの枠組みもなかったと思います。

それでは、グゼーリ・ヤーヒナの紹介に移ります。グゼーリ・ヤーヒナは2015年に『ズレイハは目を開ける』という長編小説で本格的な作家デビューを果たしました。同時にこの作品でボリシャヤ・クニーガ賞とヤースナヤ・ポリャーナ賞という二大タイトルを手に入れ、ロシア文学界で

一躍有名作家の仲間入りをしました。

彼女の経歴です。1977年カザン生まれ。父親はエンジニア、母親は医者という家庭です。12歳までは祖母の影響でタタール語も話していたそうですが、ヤーヒナの言葉によると、その後、タタール語は忘れてしまったということです。カザン国立大学英独語学科を卒業し、その後、モスクワでマーケティングやPR、広告業界で働いていました。その傍ら、モスクワ映画スクールの脚本科を修了しています。

最初に短編を二つ、文芸誌に発表していますが、彼女の本格的な文壇デビューはやはり2015年の長編小説『ズレイハは目を開ける』であったといえます。

これはロシアの大手出版社ACTが優れた現代ロシア文学作品を世に送り出すことを目的として、編集長であるエレナ・シュービナの名前を掲げて立ち上げた《エレナ・シュービナ編集“РЕШ”》というブランドから出版されました。他にも大きなタイトルを獲得した有名な現代ロシア文学がこのシリーズから発表されています。今やこのブランド“РЕШ”抜きで現代ロシア文学は語れないのではないかと思います。

グゼーリ・ヤーヒナはその後3年ごとに“РЕШ”から長編小説を発表しています。今日は時間の関係で長くはご紹介できませんが、2018年に発表の《Дети мои (わが子らよ)》、英語などの訳では『ヴォルガの子供たち』と訳されることも多いこの作品も、ボリシャヤ・クニーガ賞をはじめ国内外で幾多の賞を獲得しています。そして2021年、つまり今年発表されたばかりの『サマルカンド行き疎開



- タタールスタン共和国**
 ロシア連邦内の共和国
 公用語：ロシア語とタタール語
 タタール人53.2%
- タタール文学とは**
 狭義：タタール語で書かれた文学
 広義：タタールと深く関わる文学
- タタールスタン共和国作家同盟**
 タタールスタン共和国作家同盟は、タタールスタン共和国の領土に住み、文学的創作の分野の一つで積極的に活動し、タタール語もしくはその他の言語で執筆している市民たち、またはタタール文学に多大な貢献をもたらした共和国外に住む人々をまとめる公的組織（創作同盟）です。

タタールスタン共和国作家同盟HP

グゼーリ・ヤーヒナ
Гузель Яхина

- 1977年 カザン生まれ
- カザン国立教育大学卒業
- モスクワでマーケティング、広告業界で働く
- モスクワ映画スクール 脚本科 修了
- 2015年『ズレイハは目をあける』
- 2018年『わが子らよ』
- 2021年『サマルカンド行き疎開列車』

列車』という長編小説があります。

今日は彼女が華やかな作家デビューを果たした『ズレイハは目を開ける』についてお話しします。タタールとの関係でいうと、この作品が今日のテーマとなるべき作品です。2015年に出版され、ポリシヤヤ・クニーガ賞（第1位）とヤースナヤ・ポリャーナ賞を受賞し、作者と同様にこの作品自体も一気に注目を集めました。既に20以上の言語に翻訳されています。

この作品に前書きを寄せた大先輩の作家ウリツカヤは、この作品を次のように紹介しています。「わが国には、帝国に住む諸民族のいずれかに属しながら、ロシア語で執筆した二つの文化を持つ素晴らしい作家の団がいた。ファジリ・イスカデル、ユーリー・リトヘイ、アナトーイ・キム、オルジャス・スレイメノフ、チングス・アイトマートフ…。この一派の伝統は、民族的な題材への深い知識であり、他民族の人々に対する尊厳と敬意に満ちた態度であり、フォークロアをデリケートに扱うことにある。[中略]新しい散文作家、若いタタール女性のグゼリー・ヤーヒナは現れるやいなや、いともたやすくこの巨匠たちの列に並んでしまった」。

ウリツカヤが指摘しているように、このデビュー作でとりわけ注目されたのは、まずヤーヒナ自身がタタール出身であったということ、そして伝統的なタタールの生活を詳しく描いたということでした。

この小説はズレイハというタタール人女性が主人公です。物語は1930年、カザン郊外のタタールの村《ユルバシ村》から始まります。30歳で緑色の目が特徴的なズレイハは、敬虔なイスラム教徒です。伝統的なタタールの風習の中で暮らし、すべてにおいてアッラーの御心に頼りつつ、同時にさまざまな土着の精霊たちの存在も信じています。夫のムルタザは15歳も年が離れていて、イスラムの教えにのっとりとした厳しい家長です。また、家にはズレイハが「吸血鬼婆（ウピリィーハ）」と心の中で呼んでいる邪悪な義理の母も同居しています。伝統的な生活の中で、ズレイハは夫に付き従い、自らの意思で決定することを知らず、ただただ怠け者と言われることを恐れて働きづめの日々を送っています。それがある日、政府の富農撲滅運動の標的となつて夫は殺され、彼女は一人、シベリアのエニセイ川流域に強制移住させられるという物語です。

ちなみに、この小説は既にロシア1というテレビ局でドラマになり、放送されました。やはりタタール系のチュルパン・ハマトワが主演を演じています。

皆さんのイメージが膨らむように、こちらの写真をお見せします。小説の第1部ではタタール民族の生活が繰り返されています。しかも設定として、ズレイハはロシア語が上

手ではありません。ですから、物語にはタタール語も頻繁に使われ、作者のヤーヒナはロシア語読者のために巻末にタタール語の語句と表現の索引を付けています。本作品のタタールの要素は誰もが認めるところで、ヤーヒナもタタール系ですから、この本が出版された当初は「これこそが真のタタール文学だ」と断定するような紹介もありました。

ところが、理解が進むにつれて、小説における民族性の問題は評価が大きく分かれることとなります。物語の進行とともに、民族的要素がだんだん弱まっていったためです。

家族と離れ、故郷を離れたズレイハにとって、最後に家族といえるのは、民族もまちまちな赤の他人である隣人になっていきます。同じコロニーに行き着いた、雑多な民族の強制移住者たちでした。そして、ズレイハはロシア人をはじめとする他者の考えを受け入れていくようになります。伝統的なタタールのフォークロアから離れていくズレイハは非常に肯定的に捉えられていきます。

そのため、その後、この作品はタタール人批評家から強い批判を受けることになりました。同じタタールスタン共和国作家同盟のメンバーであり、タタールスタン共和国国民作家の称号を持つラビト・バトゥラ氏は厳しい批判を展開し、『ズレイハは目を開ける』の民俗や時代考証の誤りを列挙した上で、物語の結末から「ヤーヒナは言外にタタール民族が消滅する運命だと書いている」という非難さえしました。

一方、ヤーヒナはどうかと言えば、彼女自身は自分がタタール作家であると言ったことは一度もありません。多くのインタビューの中で彼女が繰り返しているのは「自分はタター



ル作家ではなく『カザンの作家』だ」ということです。

あるインタビューの中で、ヤーヒナはタタール文学との関係性を尋ねられて「私はロシア語で読み書きをしています。もう人生の半分をモスクワで暮らしています。ですから、そもそも私はタタール文学のプロセスの中にはいませんし、それについてもよく分かっていません」と述べています。さらに「では、タタールにルーツを持つロシア作家ですか」と聞かれて「ロシア作家かどうかは分かりませんが、私は自分を『カザンの作家』と名付けたいです。カザンにはロシア文化もタタール文化も対等に息づいています。だから、私には、人生の半分をモスクワで暮らしてはいますが、『カザンの作家』という定義が自分には一番近いのです」と述べています。

ロシア文化とタタール文化という二つの文化を併せもつ二文化性は、この作品の特徴でもあり、それまでのソビエトにいた多くの多民族作家の作品にもいえることです。しかしながら、ヤーヒナの目指すところはロシアとタタールの二つの文化の共存だけにとどまるものではありません。

他の作品についてお話しする時間がありませんでしたが、例えば『わが子らよ』はヴォルガ流域のドイツコロニーに住むドイツ人たちの話です。ドイツ人の教師であるヤコブ・バッハという人の半生を描いています。そして、このドラマにもやはりドイツの青年や出自が分からない娘、キルギスの少年といった登場人物が出てきます。

そして、今年出たばかりの『サマルカンド行き疎開列車』は、1923年ごろ、ヴォルガ地方に起こった飢饉から孤児や身寄りのない子どもたちを救うため、彼らをサマルカンドへ疎開させたというジェルジンスキーの列車がモデルになっています。ここでもいろいろな民族の子どもたちが集められて登場しています。ヤーヒナの物語の中にはさまざまな民族の人々が登場し、互いに助け合う姿が描かれます。

例えばズレイハが行き着いた新しい居住地にも、19もの民族がひしめき合って共存していました。極寒の地のシベリアに強制移住させられて、本来なら地獄のようなのですが、ズレイハは最後に「ここに来て良かった」とつぶやきます。ある批評家はこの作品について「ポスト民族文学の現象である」と言っています。民族という枠を超えた人間同士の交流や普遍の原理に目を開くものであると言えます。

ヤーヒナの作品はまだ三つしかありませんが、ソ連の始まりを探る大きな柱の一つになっています。「私たちはソビエトの終わりを身をもって体験して知っている。しかし、ソビエトの最初は、まだぼつかり開いた穴のような、まだ傷口が治まっていないトラウマのようなものである。そこには恐怖もあったが、希望もあった。負の側面もあったが、正の側面



ヤーヒナ作品の特徴

- ・ソ連のはじまりを探る 負と正の共存
- ・辺境の物語
- ・現実とファンタジー
- ・少数民族の視点
- ・多民族の共生の理想

もあった。私はそこに強く引かれる」とヤーヒナは言っています。

彼女の作品は、カザンやヴォルガ地方から始まる辺境の物語ばかりです。モスクワやペテルブルグという大きなロシア、つまり本土（ボリシャヤ・ゼムリヤ）という言葉が物語の陰で響きますが、物語自体はいつも辺境が舞台になっています。

そして、彼女の作品のもう一つの特徴は現実とファンタジーが入り交じっていることです。ズレイハは地獄のようなシベリアの移住地へ行っても最後には良かったと思います。また、『ヴォルガの子供たち』では革命でひどい惨劇が起きている最中に、バッハのいる場所だけは全てを忘れた桃源郷のように、人生で一歩平和な日々が過ぎていきます。作者ヤーヒナのプロ意識は高く、「私は読者をがっかりさせたままで読み終わらせるわけにはいかない。だから、そういう悲しい結末にするわけにはいかない」と言います。厳しい現実を描きながらも必ずそこには希望があり、ファンタジーがあるというのが彼女の作品の特徴といえます。

少数民族の視点、多民族の共生の理想というのは先ほどお話ししたとおりで、これらはグゼーリ・ヤーヒナがロシア人ではなくタタール人であったことから得られた視点だと思います。

では、これで私の発表を終わりにいたします。

梶山 守屋さん、ありがとうございます。守屋さんの翻訳、『ズレイハは目を開ける』は来年刊行予定と伺っておりますので、楽しみに待ちたいと思います。

では、続きまして慶應義塾大学の越野先生です。越野先生はドストエフスキーから現代文学まで幅広く研究されていますが、今回はご自身が現地に2年間滞在されたベラルーシの文学についてお話ししていただきます。越野先生、よろしいでしょうか。

越野 ご紹介をありがとうございます。では、始めさせていただきます。私はベラルーシの現在の文学について、主にロシア語とベラルーシ語の二つの言語の関係に焦点を当ててお話ししたいと思います。

現在のベラルーシの日常生活では、圧倒的にロシア語が優勢で、ベラルーシ語は限られた局面でしか使われていません。ですが文学という領域では少し状況が違い、ベラルーシの作家であればベラルーシ語で書くべきだという意識は現在でもまだ保たれているようです。ただ、読者が限られていますので、商業的に持続していくのは非常に困難な条件下にあります。

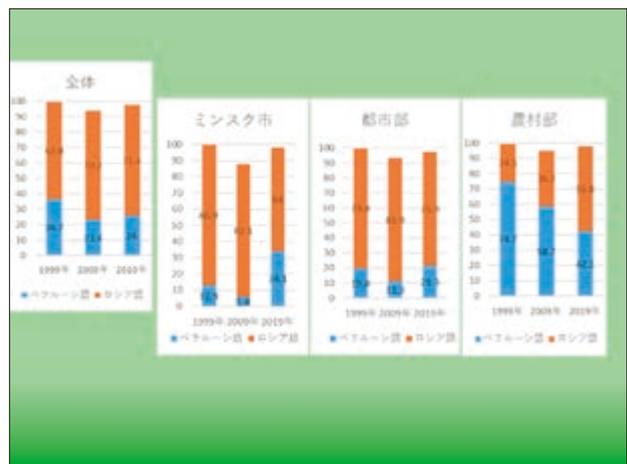
何人かの作家について触れていきます。まず最初は主にロシア語で書く作家、アレクシエーヴィチです。彼女の作品がベラルーシ文学なのかという議論はいろいろあり得ますが、彼女の作品の中で最もベラルーシ的な作品を選ぶとしたら『チェルノブイリの祈り』になると思います。

『チェルノブイリの祈り』はウクライナの有名な現代作家であるオクサーナ・ザブジュコがウクライナ語に翻訳しています。出版された翌年にもう翻訳が出ているので、かなり早いです。ウクライナもチェルノブイリ原発事故で大きな被害を受けているので、この作品の刊行は他人事ではなかったのでしょうか。ザブジュコがある種、かなりの使命感を持ってこの翻訳に挑んだことが分かります。

面白いのは、ザブジュコがこの翻訳の序文で書いていることです。引用を画面に挙げています。ザブジュコはチェルノブイリ原発事故という悲劇そのものについてはもちろんですが、アレクシエーヴィチの作品がベラルーシ語ではなくロシア語で書かれていることに大きな衝撃を受けています。たいへん強い言葉でこの書かれている言語を「無性格な言語である」、あるいは「植民地的なニュースピークだ」とまで表現しています。話し言葉は職業や地域などによって少しずつ異なるはずなのに、そのような言語の多様性をアレクシエーヴィチのロシア語の中に読み取れなかったのです。ザブジュコは自分の翻訳の中では「本来、ベラルーシの言語が多様性を保っていたのであればそうなっただろう理想的な言語状況をウクライナ語で再現した」と言っています。

ザブジュコの指摘には当たっている面もありますが、ベラルーシの言語状況についてやや誤解を生むようなところもあります。ベラルーシ語が多様性を失いつつあるのは確かですが、ベラルーシで話されているロシア語にはもう少し多様性があり、「ニュースピーク」とまで言うのは言い過ぎだろうと思います。ここにはむしろベラルーシほどではないにせよ、ウクライナでも依然としてロシア語が使用される言語状況に対するザブジュコ自身の視点が反映されているのではないかと思います。

次に10年ごとに実施されている国勢調査のデータをもとに、ベラルーシ語の言語状況を見てみましょう。ソ連時代から「あなたの母語は何ですか」という質問が行われており、



ベラルーシ語を母語だと考える人の割合がどんどん少なくなっていることが分かります。ただし、あくまでこれは母語についての質問です。日常生活で話されているベラルーシ語の状況とは一致しません。ソ連解体後に国勢調査に加わった「日常的に使用している言語は何か」を問う質問によると、実際には国民の2割から3割程度の人しかベラルーシ語を使用していないことが読み取れます。

しかし、最新の2019年の統計を見ると、同じ質問に対してベラルーシ語を選ぶ人が少しだけ増えています。わずかな誤差にも見えますが、その内訳を地域ごとに詳しく見ると、首都のミンスク市だけ「ベラルーシ語を使用している」と回答した人の数が大幅に増えています。10年前は5%だったのが35%近くまで増えていて、これが全体の統計の数値に影響したわけです。これほど急激に言語状況が変わるのはさすがに不自然に見えます。恐らくもともと二つの言語を使用できる一定数の住民がいて、その人たちの意識が変化したのではないかと、つまりどちらの言語も話せる(ひょっとするとロシア語の方が流暢かもしれない)けれど、国勢調査ではベラルーシ語を選ぶという傾向が生じたのではないかと思います。こうした新しいタイプのベラルーシ語話者は、近年のルカシェンコ体制に反対する人たちの核になっている可能性があるかと私は考えています。

一方で農村部は、都市部に比べればベラルーシ語話者

が多い地域でした。しかしこの統計から分かるように、どんどん農村のベラルーシ語話者は減っています。農村のベラルーシ語は標準的なベラルーシ語とは少し違って、方言やロシア語と混ざったような言葉がしばしば使われます。こうした言語を話す農村の比較的年配の人たちは、ルカシェンコ体制の重要な支持基盤のひとつだったといわれています。首都を中心に増加する新しいベラルーシ語の話者と、農村部で衰えつつあるベラルーシ語の使用状況はきわめて対照的です。

次に3人の現代作家を例に挙げて、近年の文学の状況についてお話ししたいと思います。3人ともロシア語とベラルーシ語をそれぞれのやり方で使い分けた人たちです。

最初に挙げるアダム・フロースという作家はやや古く、1990年代から活躍した人です。ロシア語で大衆向けに推理小説や映画のノベライズ本を大量に書き、ベラルーシだけではなく旧ソ連のロシア語圏全体で商業的に成功を収めました。その一方、ベラルーシ語では純粋な文学作品、実験的あるいはポストモダン風な作品を書き、これもベラルーシ語文学の愛好者の間で人気の作家となりました。ここに挙げてあるのはその代表作の一つです。

最近の作家の例としてヴィクトル・マルツィノヴィチという人を紹介します。マルツィノヴィチは奈倉さんが最近訳された『理不尽ゲーム』のフィリペンコとほぼ同じ、あるいはやや年上ぐらいの世代の作家です。彼も二つの言語の使用者ですが、フロースのようにジャンルによって使い分けるのではなく、ロシア語とベラルーシ語でほぼ交互に小説を書き、同時にもう片方の言語での翻訳作品を提供しています。ただし自分で翻訳しているわけではありません。

フロースは親が著名なベラルーシ語の作家（ヴィヤチャスラウ・アダムチク）だったこともあり、自然にベラルーシ語が話される環境で育ったようですが、マルツィノヴィチの生まれた家庭の言語はロシア語で、ベラルーシ語は作家になった時点ではうまく使いこなすことができませんでした。「小説を書きながら、ベラルーシ語を練習した」と本人も言っています。そのため文法的な間違いも多かったのですが、それを編集者が指摘しながら直していったという過程自体を小説の題材にしたのが2011年の『寒い楽園』という作品です。マルツィノヴィチのように自由に二つの言語を切り替える姿勢は、最近の国勢調査で見られたような新しいタイプのベラルーシ語の話者に近いのではないかと思います。ここに引用してあるのは『墨瓦（モーヴァ）』という、中国とロシアによって二重に支配される近未来のミンスクの物語です。ディストピア小説は彼が得意とするジャンルのひとつで、最近のロシアやベラルーシの政治状況との連想を

引き起こします。

最後に紹介するのはアリヘルド・バハレヴィチです。マルツィノヴィチより年上ですが、近年活躍の目覚ましい作家です。ベラルーシ独立直後の1990年代初頭にちょうど感受性の強い10代後半だったので、当時盛り上がっていたナショナリズムと民族文化の流行に大きな影響を受けたはずです。この時期に意識的に使用言語をベラルーシ語に切り替えた同世代の人は多くいました。そのような風潮の中でバハレヴィチもベラルーシ語で作品を書くようになったのだと思います。

バハレヴィチはドイツにも長く住んでいてドイツ語もできるのですが、もっぱらベラルーシ語で創作し、文学者として高い評価を得ました。作品は主にドイツ語や英語に翻訳されています。最近の話題作は、近未来のベラルーシを舞台にしたディストピア、あるいはディストピア小説のパロディーのような長編小説『ヨーロッパの犬』です。この作品はバハレヴィチが自らロシア語に翻訳し、ロシア国内で評価されてポリシャヤ・クニーガ賞にノミネートされ、ショートリストまで残りました。もともと他の言語で書かれた作品の自己翻訳がロシア語文学の作品として認められたという興味深い事例です。

簡単なまとめに入ります。最近の国勢調査の結果やマルツィノヴィチのように自由に言語を切り替える作家が現れたこと、あるいはバハレヴィチのようにベラルーシ語で書くことを重視していた人がロシア語への翻訳を自ら試みるという状況から、ロシア語とベラルーシ語は単に対立するのではなく、自由に入れ替え可能な新しい関係をつくり出しているといえます。ロシア語作家であるアレクシエーヴィチがノーベル文学賞を受賞し、ベラルーシを代表する作家として認められたことも大きいでしょう。ベラルーシの独自の文化としてベラルーシ語を残しながら、一方でロシアの外部であるベラルーシの側からロシア語とロシア文学を積極的に豊かにしていく可能性が見えると思います。私の発表は以上です。

梶山 越野先生、ありがとうございます。続きまして奈倉有里さんです。奈倉さんは高校卒業後、単身、ロシアに渡った来歴について、最近、著書を刊行されました。ロシア文学全般に詳しく、本人に今回のシンポジウムの登壇をお願いしたところ、今の一推しはウクライナということなので、ウクライナの現代文学について報告していただきます。奈倉さん、よろしいでしょうか。

奈倉 ありがとうございます。一推しということでもないので、ウクライナを担当させていただく奈倉です。よろしくお願ひします。

初めにウクライナ文学を考えるに当たり、『ガリツィアの

消えゆく記憶と繋がり

—ソ連崩壊後 30 年の文学と社会を語る—

ウクライナ編 (奈倉有里)



1. 前提「ウクライナ文学」という概念について

「ウクライナ文学」という概念はウクライナ語が独立した言語として認められる 1920 年代以降に事後的に成立したものであり、ゴーゴリの同時代にはウクライナ文学はロシア文学の中の小ロシア語方言文学としてロシア文学のジャンル概念のなかに位置づけられていた。

ウクライナ文学史におけるゴーゴリ —『ローチンツィの定期市』のエピグラフを手掛かりに 伊東一郎「ガリツィアの森」(p55)

2. ソ連崩壊後の動き

・ソ連崩壊後、ロシアで地下出版の書が広く読まれるようになったのと連動して、ウクライナでもそれまで活字にできなかったウクライナ作家・詩人の作品が出版されるようになった。

・ウクライナ在住のウクライナ語作家・ロシア語作家のほか、西欧在住のウクライナ語作家も。



3. 現代の「ウクライナ文学」

一般的な分類



ウクライナ在住・ウクライナ語作家

ウクライナ在住・ロシア語作家 アンドレイ・クルコフ



森』という本の「ウクライナ文学史におけるゴーゴリ」において、伊東一郎先生は『「ウクライナ文学」という概念はウクライナ語が独立した言語として認められる 1920 年代以降に事後的に成立したものであり、ゴーゴリの同時代にはウクライナ文学はロシア文学の中の小ロシア語方言文学としてロシア文学のジャンル概念の中に位置づけられていた」(55 頁)とご指摘されています。シェフチェンコがロシア語とウクライナ語の両方で執筆をしていたことやロシア語で執筆していたゴーゴリにウクライナ口承文芸の影響が深く見られることなどを全て併せて考えてみても、ウクライナ文学の歴史を考える上でこれを念頭に置いておくことが大切だと思います。

さて、ソ連崩壊後、ロシアで地下出版の書が広く読まれるようになったことと連動して、ウクライナでもそれまで活字にできなかったウクライナの作家・詩人の作品が出版されるようになりました。20 世紀初頭に活躍した詩人や後期ソ連時代に地下出版で活動していた作家など、再発見、再評価された作家も多かったです。今回はもう少し新しい、主に 2000 年代以降の文学についてお話いたします。

現代においてウクライナ文学といった場合、一般に想起される分類では大きく分けて二つあり、ウクライナ在住あるいはウクライナをテーマとして描くウクライナ語作家とウクライナ在住あるいはウクライナをテーマとして描くロシア語作家がいます。

まずウクライナ語作家では、若い世代からいきますと 1984 年生まれのリュブコ・デレシがヴィクトル・ペレーヴィンとも比較されるような、いわば古き良きポストモダン的な

作風で若者に人気を博しています。あるいは 1982 年生まれのソフィヤ・アンドルホーヴィチはユーリー・アンドルホーヴィチの娘で、翻訳家としても活躍しています。次にもう少し上の世代では 1974 年生まれのセルヒー・ジャダン、さらにその上の世代では、先ほどのお話にも出てきましたオクサーナ・ザブジュコです。

先ほど越野さんのお話にもあったように、彼女は詩人でもあり、翻訳家でもあり、何よりウクライナ語運動の推進者でもあります。つい先ほど越野さんにもご確認いたしましたところ、アレクシエーヴィチの翻訳の序文コメントは 1998 年の時点でのものですが、実はザブジュコはアレクシエーヴィチと話し合った上で『チェルノブイリの祈り』の新訳を 2016 年に出しています。そこでは序文を改訂し、最初に読んだときはかなり印象が違うことを示し、自身とアレクシエーヴィチの対談などを取り入れています。さすがに今現在は、ザブジュコもベラルーシやベラルーシ語に対して 90 年代末のままの認識で生きているわけではないことを補足しておきたいと思います。

ウクライナにおいて、ウクライナ語主義的なところはもちろん変わりませんが、ベラルーシと大きく異なるのはまさに全体的に強硬なウクライナ語化政策が進められていることで、その点ではむしろアンドレイ・クルコフが言っているように、ウクライナにおけるロシア語作家の権利や発言、立場を同時に守る必要が出てくると思います。

アンドレイ・クルコフは 1961 年にレニングラードで生まれ、3 歳のときに家族と共にキエフに引っ越してウクライナで

育った作家です。日本語で読めるのは沼野恭子訳の『ペンギンの憂鬱』、前田和泉訳の『大統領の最後の恋』、そして最新では吉岡ゆき訳の『ウクライナ日記』という作品で、これらはソ連崩壊、ソ連末期から数年前までのウクライナの理解に非常に役立つ本でもあります。ここにはウクライナとそこに生きる人々が登場し、しばしば描かれる動物は主人公や社会、作者の分身的な存在として描かれていきます。

まず『ペンギンの憂鬱』では、当時、ロシアもまだそうであったように、ソ連の崩壊から間もないキエフで犯罪が多発し、マフィアの恐怖が身近にあります。そのなかで、主人公の飼うペンギンは動物園に生きているわけでもなく本来生きるペンギンの群れにいないわけでもない、いわばぐれペンギンで、そこに主人公自身の姿が重ねられていきます。

あるいは『大統領の最後の恋』では時系列を大きく三つに分け、1970年代以降のソ連時代、ソ連崩壊後の1990年、そして執筆当時から見れば近未来に当たる2011～2016年を舞台にウクライナ各地やクリミアを描き、歴史の深みとともにコミカルな近未来予想も面白く、今、読み返すと実際にその予言的中しているように読める箇所もあるという作品になっています。この中では一番長い作品です。

『ウクライナ日記』は原題の「マイダン日記」というタイトルが表しているように2013年11月から2014年4月の作家の日記であり、ウクライナ危機と呼ばれた日々の刻々とした移り変わりが伝わってきます。

さて、これらに加えて、その後のウクライナを描いた作品として『灰色のミツバチ』という作品を紹介しておきたいと思います。まだ日本語の翻訳はないのですが、先ほどご紹介いただいた著書『夕暮れに夜明けの歌を』（イースト・プレス）という本の29章にこの作品について詳しく書いています。よろしければご参照いただきたいと思います。

2018年に発表されたこの『灰色のミツバチ』という作品では、ウクライナの東部、いわゆるグレーゾーンで、激戦区ではないにせよ既にほとんどの住民が村を後にしている村で、主人公のセルゲイは幼なじみのけんか友達パーシカと2人だけで取り残されています。過ぎゆく日々がいつも似通っていて、遠くに響く銃声さえもが村の静寂の一部になっているという中で生きていました。主人公はこの紛争の対立には関与したくありませんでした。このセルゲイという名前をもじってセールイ、灰色と呼ばれている彼は、その名のとおり、白にも黒にもなりたくなかったのです。ところが次第に紛争が身近になるにつれ、ほほ笑ましかったけんか友達との間に修復し難い亀裂が生まれ、セルゲイはついに村を去る決心をします。

セルゲイは養蜂をして生活していました。ハチをととても大

そのほかの視点

現代ロシア文学のなかでウクライナはどのように描かれるのか

プラットフォームとしてのウクライナ

例 → ベラルーシやロシアで上演できない作品をキエフで上演する

逆にウクライナだからこそできないこと、言えないこと

→ いわゆる「脱共産主義法」と呼ばれる言論規制

「ホロドモール（人為飢饉）の否定、共産主義・ナチズムの賛美」の禁止

→ 現代ウクライナ文学におけるソ連の記憶はどう語られ得るのか

ほかの発表者に訊きたいこと

いま各地域で「言論の自由」はどのような状況にあるのか

ソ連時代とは違う「不自由さ」はどのような形で存在するのか

作家はそれに対処するような行動をしているのか



事にしている、ミツバチの巣箱を車の後ろに積み、けん引して検問所を通るたびに「ミツバチが銃撃戦を怖がるから、ミツバチを紛争から逃れさせてアカシアの花の咲く地域へと連れていかなきゃいけないんだ」と言いながら旅をしていきます。ザポロージェの小さな村へ、そしてクリミアへ行きます。

そのようにミツバチを中心に世界が回っているような人物でありながら、セルゲイの心は閉ざされてはおらず、ミツバチとともに飛び回り、ロシア人とも、ウクライナ人とも、クリミア・タタールの人々とも軽々と交流し、多くの人から好感を持たれるという人物でもあります。ところが、どこに行ってもそういう灰色の人物に関心ではられない人がいます。そのような人々にとってセルゲイは常によそ者であり、彼らに警戒されたり疎まれたりしました。セルゲイ自身、それを敏感に察知するので、どこへ行っても結局は居場所を見つけられず、ついには故郷のグレーゾーンへ帰っていきます。

この作品は作者のクルコフが実際にグレーゾーンへと何度も足を運び、取材をして書いたもので、現実のウクライナ東部の問題を描き出す描写も多く見られます。2014年以降しばらくは日本でもウクライナについての報道が多々されていて、当時のことを覚えている方もいらっしゃると思いますが、次第に報道が減っていきました。しかし、当然ながら現地では生活が続いていて、衝突は突然なくなっているわけでもありません。そこには一人一人の暮らしを詳細に知らなければ伝えようのない真実があり、それを描き取る可能性を持っているのが文学でもあると、クルコフの作品を読んでいると感じられます。

グゼーリ・ヤーヒナにしても、ベラルーシにしても、お話を聞いていて思ったのですが、私が自著でこの作品の紹介をした章に「灰色にもさまざまな色がある」というタイトルを付けたのは、一見、同じ色に見えても同じではないということです。このことはウクライナだけではなく、ベラルーシやタタルスタン、その他の地域を考える上でも重要な考え方なのではないかと思いました。

ウクライナという場所の特徴について、最後に少し付け足しをしたいと思います。先ほど少し名前を挙げていただいたフィリペンコの『理不尽ゲーム』ですが、本来、フィリペンコ自身はミンスクでこれを舞台化して上演したかったそうです。計画が途中まで進んでいたのですが、やはり現在のミンスクでは非常に難しく、その代わりにキエフで実現しました。こうした例はフィリペンコに限らずロシアとウクライナを通しても見られますが、逆にウクライナだからこそできないことや言えないこともあります。

各地域でそうした言論に対する風当たりの強さやソ連時代とはまた違った不自由さのようなものがあるとしたら、それは一体どういうところにあるのでしょうか。せつかくいろいろな専門の方がいらっしゃるのでもし時間に余裕があれば、後でぜひ他の発表者の方にお伺いしたいと思います。

ちなみに世界報道自由度ランキング 2021 年版では、ラトヴィアが 22 位、ジョージアが 60 位、日本が 67 位、ウクライナが 97 位、カザフスタンが 155 位、ウズベキスタンが 157 位、ベラルーシが 158 位となっています。これには情報の透明性が深く関わってきています。全ての研究者にとっても情報の透明性は非常に重要になってきますので、その辺りも含めてお話が何えればと思ひ、今日は楽しみにしていました。以上です。ありがとうございました。

梶山 奈倉さん、ありがとうございます。続きまして、日本学術振興会特別研究員の五月女颯さんによるジョージアについての報告になります。五月女さんは今日の登壇者で最年少の 1991 年生まれで、奇しくもちょうどソ連崩壊の年に生まれました。専門は 19 世紀のジョージア文学ですが、ロシア語とジョージア語が共に堪能で、今日は特別に日本ではなかなか知る機会のない現代のジョージア文学について報告していただきます。五月女さん、よろしいでしょうか。

五月女 ご紹介いただきました五月女です。学振の特別研究員をやっています。ロシア語は全く堪能ではないですが、専門はジョージアということで、今回はジョージアの 30 年を文学から眺めたいと思います。

まず、この 30 年で何が起きたかについて、簡単に振り返っていききたいと思います。ソ連崩壊後、1991 年から初代大統領のガムサルディアと反体制派との間で、首都トビリ

シを中心として内戦が起こり、大統領の国外脱出などもありました。それからアブハジアと南オセチアでも分離独立派との戦争が起こり、1990 年代は大変混乱した時代でした。

その後、2 代大統領として、ソ連時代に外務大臣を務めたシェヴァルドナゼ（シュワルナゼ）が就任します。その後、2003 年になるとバラ革命が起こり、旧守的である種ソヴィエト的な政権は倒され、3 代大統領にアメリカで弁護士経験もあるサアカシヴィリが就任します。このサアカシヴィリ政権下で 2008 年にはロシア・ジョージア戦争が起こり、ジョージアの敗戦で終わります。この戦争を契機として、サアカシヴィリは求心力を低下させ、最終的に下野するわけです。

その後、サアカシヴィリはウクライナに移り、ウクライナ政治に参加しました。最近、ジョージアで統一地方選があり、その一環としてサアカシヴィリは帰国して、今、逮捕されています。日本も選挙がありますが、ジョージアでも明日、30 日土曜日が選挙で、注目されるところです。

このような紛争によって、公式の数字では 2009 年の時点で 25 万 1,000 人以上の国内避難民が存在するとされています。これは人口のおよそ 6% です。このことが 90 年代以降のジョージア社会や経済にとって大きな問題となっています。

2008 年の戦争やアブハジア戦争などの後ろ盾にはロシアが当然いるわけで、ロシアへの反感は非常に強いものがあります。アブハジアや南オセチアを指して「ジョージアの領土の 20% が occupied されている、占領されている」「ロシアは占領者だ、occupant だ」というスローガンが人口に膾



ジョージアのポストソヴィエト30年

- ・ソ連崩壊後、内戦とアブハジア戦争により、90年代は混乱を窮めた。
- ・2008年 ロシア・ジョージア戦争（サアカシヴィリ政権下）
- ・2009年時点で251,000人以上の国内難民（人口の6%程度）。
- ・全体として、反露感情は強い。
- ・だが、経済面では依拠（観光産業、ワイン輸出等）。

多しています。しかしながら、経済面では、特に観光産業やワインの輸出先としてロシアは依然として関係が深いので、ロシアとの距離はなかなか取りづらい面があります。

両方とも男性で申し訳ないですが、90年代以降に活躍している2名の現代作家の代表作をご紹介しますと思います。

まずアカ・モルチラゼの『カラバフへの旅』という小説です。これはペンネームで、本名はギオルギ・アフヴレディアニといいます。1988年にトビリシ大学の歴史学部を卒業し、歴史学者としての顔も持っています。最も著名な現代作家の一人で、ジョージアで最も有力な文学賞である「サバ」の小説部門を6度受賞しています。『カラバフへの旅』は1992年に出版された小説で、2005年には映画化もされています。

まず語りの特徴として、一人称の語り手が独白して物語が進行していきます。そのために時系列が前後したり、過去の回想が突然、挿入されたりと重層的に物語が進んでいきます。

またスラングや罵倒語などの口語表現が非常に多く使われています。これは私見ですが、1990年代のジョージア人（グルジア人）の倫理的・精神的な疲弊や退廃をあたかも物語っているような気がします。主人公である語り手はジョージア人ですが、作中ではカラバフに行くので、アルメニア人やアゼルバイジャン人、ロシア人が登場します。そのような他の民族に対して、また同様にジョージア人自身に対しても、こうした罵倒語を用いてののしったり、侮蔑したりということが書かれています。

あらすじです。まずこの語り手の主人公は悪友のたまり場で、とある娼婦と出会って恋に落ちます。子どももできるのですが、家族らによって墮胎させられ、結局、その恋人も失うというエピソードがあります。その後、その友人と大麻を密輸しようとしてアゼルバイジャンのガンジャという町に向かいます。しかし、その過程で道を見失い、アゼルバイジャンとアルメニアの係争地帯であるナゴルノ＝カラバフ地方に迷い込んでしまいます。このナゴルノ＝カラバフは去年の9月から10月にかけても大規模な戦闘が起きたことで記憶に新しく、アブハジアや南オセチアと同様、南コーカサスの一種の火薬庫ともいえる場所だと思えます。

そこに迷い込んだ結果、アゼルバイジャン軍に主人公たちは捕まります。しかし、その後、アルメニア軍がアゼルバイジャン軍を襲撃し、身柄がアルメニア側に移されます。当初はこれで解放されたかと思った主人公の語り手ですが、実際にはアルメニアの捕虜となっていることに気がきます。これは語り手がそう言っているだけで、実際にアルメニアの捕虜となっていたのかは分かりませんが、そこからの脱出を



図ろうとします。

一緒に捕虜になっていたアゼルバイジャン人とアルメニア側から脱出し、その後、トビリシに無事に帰還しますが、結局、トビリシの元の生活に戻るだけで、この語り手である主人公は脱力感や無力感を抱き、ベッドで横たわって家族や友人との会話さえ面倒がる、というのがおおよそのあらすじです。

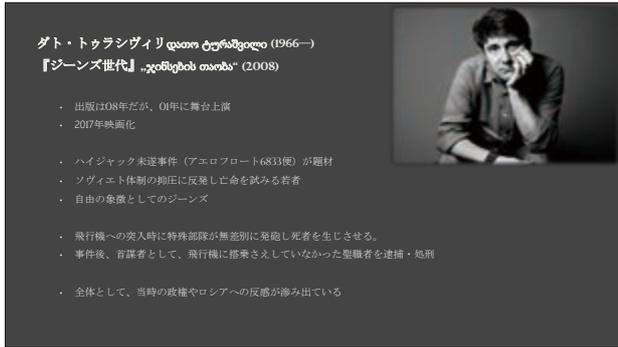
このあらすじからも分かるように、ソ連崩壊直後から今日に至るまでのジョージアやコーカサスの混乱した様子が描かれています。アルメニア、アゼルバイジャン、ジョージアといったそれぞれ民族が、自分の利益のために戦争をし、あるいは捕虜を取っています。また作中ではロシア人の「民主的な」ジャーナリストがカラバフへ取材にヘリコプターでやってきて、彼らが書いている書籍のタイトルがこの『カラバフへの旅』なのですが、それはコーカサスで起きている紛争のある種、傍観者的に眺めているものとしてロシア人を描いているのです。

このカラバフへの主人公の旅はもちろん冒険譚であり、脱出のシーンなどはかなりスペクタクルで読み応えもありますが、それとは対照的に帰国後のジョージアのトビリシでの生活は無力感があるもので、これはソヴィエトからポストソヴィエトにかけてのジョージア社会のある種の閉塞感を反映しているような気がします。

続いて、ダト・トゥラシヴィリ『ジーンズ世代』という小説です。彼はトビリシ大学の人文学部を卒業しています。その後、ロンドンやマドリッドでも学んでいたそうです。1980年代から学生運動に積極的に参加し、「サバ」という文学賞の戯曲部門を2度受賞しています。

今回紹介する『ジーンズ世代』は2008年の出版ですが、2001年に既に舞台として上演されていて、そのノベライズ版といえるかもしれません。演劇を含め、この作品は非常に有名で、2017年には映画化もされています。

これは1983年に実際に起こったアエロフロート6833便のハイジャック未遂事件を題材としています。この事件の実行犯は7人いて、そのうちゲガ・コバヒゼという俳優が小



説の主人公です。彼は当時、テンギズ・アブラゼ監督の映画『懺悔 Покаяние』に出演し、撮影も実際に終わっていたようですが、この事件を受けて、再度、撮り直しを余儀なくされたというエピソードもあります。余談ですが、1月末から東京の岩波ホールでまたジョージア映画祭をやるそうで、『懺悔』もそこで観ることができます。

7人の実行犯のうち、この俳優のコバヒゼの妻を除き全員、処刑されています。事件は、ソヴィエトの抑圧的な体制に反発した若者が西側への亡命を試みようとして引き起こされたもので、そのように小説にも書かれています。その際、ジーンズが自由の象徴として描かれていて、タイトルもここから来ています。

ジーンズは当時のジョージアでは手に入らない貴重なものとされています。登場人物の一人の父親が学者で、アメリカで学会出張の際に、リスクを負いつつも息子のためにジーンズを密輸するという印象的なエピソードもあります。この事件の後、1999年に犯人らの両親が本当に死んでいるのかと墓を探すという場面から小説は始まりますが、その墓を掘り起こすと当時着ていたジーンズが見つかる、という描写もあります。

ハイジャックが起きて、政権が事件を解決しようとするのですが、その際ジョージア内の高官だったシェヴァルドナゼはロシアから特殊部隊の到着を待ちます。その特殊部隊が強行突入する際、部隊は無差別に発砲し、乗客に死者を生じさせました。対してハイジャック犯らは乗客に危害を加えることはなかったものとして書かれていて、そこからハイジャック犯側の肩を持ち、反対にジョージアやロシアの政権側を批判するような書かれ方はしています。

もう一つ、事件後に、首謀者として飛行機に乗ってさえいなかった聖職者を、思想的なリーダーとしてでっち上げて逮捕するというのも書かれています。これはもちろんソヴィエトのイデオロギーに合致するものであり、これもまた批判的に書かれています。

作品全体としては、当時のジョージアの政権、シェヴァルドナゼによって処刑が決断されたり、ジョージア側がロシア

側の機嫌やクレムリンの態度をうかがったりしていることが批判的に書かれ、ロシアへの反感が滲み出ています。これは小説というよりジョージア社会全体での話かもしれませんが、19世紀以降、ロシア帝国による支配が始まった後、1917年にロシア革命があり、21年までの3年間はジョージアは独立していたとされます。その後、21年に赤軍がまた再掌握するのですが、これをロシアによる再併合と捉え、結局、19世紀から20世紀のソ連崩壊までを広くロシアによる支配と捉えるような歴史認識がジョージアの社会にはあります。『ジーンズ世代』は、その歴史認識を反映したコンテキストの中において書かれたものだと考えることができます。

以上、90年代にソ連崩壊とその後の混乱を描いた作品と現代からソ連時代のロシアの支配を描いた作品の二つを紹介いたしました。

梶山 五月女さん、ありがとうございます。ここまでは日本ロシア文学会会員による報告でした。これからの3名は、より広くソ連崩壊後の30年の文学の射程を捉えるため、学会外よりお招きいたしました。まずはラトヴィアのベストセラー小説『ソビエト・ミルク：ラトヴィア母娘の記憶』などの翻訳で知られる、ラトヴィア文学翻訳家の黒沢歩さんによるご報告です。黒沢さん、よろしくお願いいたします。

黒沢 よろしくお願ひします。この発表ではソ連崩壊後30年を念頭に、ラトヴィア文学における近年の動きと注目される作家を取り上げます。

秋、ラトヴィア文学界は詩のイベントでシーズンが始まり





ノラ・イクステナ (Nora Ikstena, 1969-)

『ソビエト・ミルク』 (Mātes Piens, 2013)

ベストセラー小説。第二次世界大戦末期からベルリンの壁の崩壊までに翻弄された生き様を、母と娘の愛憎と確執を軸に綴った、限りなく自伝に近いフィクション。



歴史小説シリーズ
『私たちが、ラトヴィア、
20世紀』

2014年に始まった歴史小説シリーズは、痛みを伴う過去の記憶を記そうという意識の共有。

ます。ラトヴィア作家協会が主催する「詩の日々」は、ラトヴィアの文豪と称される詩人ライニスの生誕100年を記念して、1965年9月11日、ライニスの記念碑の除幕式に合わせて開催されたのが始まりです。以来、毎年、の伝統として継続されてきました。スローガニックな言葉にあふれたソ連時代に心の通う真実の言葉や異なる見方への渴望から生まれたイベントです。国内外の詩人たちによる朗読の他、現在では新しい詩集やその翻訳に賞が授与されます。例年、およそ10日間に及び、国内各地の会場にはあふれんばかりの人が詰めかけ、ソ連時代に培われた詩の力が失われていないことを感じさせます。ソ連時代に書かれた力強い詩は、例えばラトヴィアの地方の自然の美しさを歌い上げているだけだとしても、その行間には抵抗の意思が込められていました。

「詩の日々」の今年のテーマは「詩は生きています」でした。12月には散文朗読会が開催されています。2019年の朗読会のテーマは「Japan」でした。また5月にはラトヴィア文学賞、7月にはラトヴィア児童文学賞が発表されます。ラトヴィア文学とは、ここではラトヴィア語で書かれた文学を指しています。

バルト三国は合唱が盛んです。新旧の詩人の詩に曲を付けて歌とする傾向は今も強く、仮に本を読まない人であっても、何げなく耳にして口ずさむ歌や合唱曲として覚えた歌が例えばノーベル賞の候補者であったヴィズマ・ベルシェヴィツァの詩だったということが多々あり、文学が身近に息づいているといえます。

近年、翻訳を通して英語圏でかつてない評価を得たラト

ヴィアの小説は『ソビエト・ミルク』です。『ソビエト・ミルク』は祖母、母、娘という3世代の女性たちが第二次世界大戦末期からベルリンの壁の崩壊までに翻弄された生き様を母と娘の愛憎と確執を軸につづった限りなく自伝に近いフィクションです。『ソビエト・ミルク』は2014年に始まった『私たち、ラトヴィア、20世紀』という歴史小説シリーズの一冊です。シリーズ全13冊の著者たちはそれぞれのアプローチで祖父母と親の世代の証言や過去の時事的記録、日記などを用いて歴史に迫っています。ドイツとの関係、ソ連時代、ソ連の崩壊過程は受け止め方が一様ではなく、過去に触れれば人によっては被害者ばかりか加担者、加害者でもあり得た事実を暴きかねません。このシリーズはそうした痛みを伴う過去の記憶をいつかは書いておかなければならないという意識を作家たちが共有していた現れだといえます。

その一作、独立国からソ連による併合、それに続くナチスドイツによる占領期という1939～1941年までの3年間を詳細なドキュメンタリータッチでつづった小説『鉛の味』の主人公は、ユダヤ人に取り違えられてポグロムの犠牲となる場面で次のように回想しています。翻訳して引用します。「ドイツ人に代わってロシア人がいたとしてもおかしくないな——偉大なスラブ民族がどんな能力を発揮するかをまんまと証明したんだ、ラトヴィア人だって、旗の色と言語がどう変わろうと、小さくかたまって、支配者の目をビクビクと伺って服従してるばっかりなんだ」。

シベリアへの強制移住も忘れられない記憶です。アンドラ・マンフェルデは自分の祖父母のシベリア追放をさかのぼった小説『土小屋の子どもたち』を各地で朗読した際に、そこで交流した聴衆たちとの対話から名もなき個人の証言、日記、書簡を基にシベリアからの帰還をつづった短編集『裸足で家にもどってきた』を生み出しました。人生を台無しにされたシベリア追放は小さな民族の個々人に共有される身近な記憶です。

また、アメリカの雑誌『World Literature Today』にて文学翻訳75選にラトヴィアから選ばれたのは『ソビエト・ミルク』の他にインガ・ガイレの詩集『人に聞かない30の質問』です。インガ・ガイレの小説『美しきものたち』は昨年のラトヴィア文学賞を受賞しています。この作家は女性の苦しみと生きづらさを歴史的に掘り下げていく連続小説を通じ、ジェンダーやフェミニズムへの傾倒を強めています。

歴史やジェンダーの深刻なテーマがあふれる中で、そうした感傷を振り切るような小説『イェルガワ '94』で突如、文学界のスターとなったのはヤーニス・ヨニェヴスです。彼のこのデビュー作は国内でベストセラーとなり、すぐにフランス語に翻訳されてEU文学賞を受賞しました。『イェルガワ

インガ・ガイレ (Inga Gaile, 1976-)

ジェンダーやフェミニズムへの模倣が強い。翻訳詩集『人に聞かない30の質問』は、World Literature Today(2018)文学翻訳75選に選ばれた。




アンドラ・マンフェルデ (Andra Manfelde, 1973-)

自分の祖母のシベリア追放の小説『土小屋の子どもたち』(Zemnieks bērni, 2011) から、有名な個人のシベリアからの帰還を載った短編集『家で来た』(Mājas pārnāca bāsa, 2018) を生み出した。シベリア追放は、個人が共有する身近な記憶。




まとめ

- ・初期の独立国家に寄せるの郷愁と自尊心が、20世紀の歴史に触れるラトヴィア文学の通奏低音となっている。
- ・自己のルーツ、過去の出来事、民族の偉人を題材とする文学が力を発揮している。
- ・ソ連時代の記憶は消えゆくどころか、多様なアプローチでまだまだ掘り起こされていき、共有されることで民族の歴史として残されていくのではない。

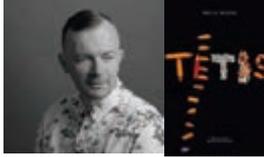
ヤーニス・ヨニェフス (Jānis Jonevs, 1980-)

小説『イェルガワ'94』(Jelgava '94, 2013) は、90年代半ばの、社会も経済も混沌とした過渡期をメタル音楽で描いた少年の成長物語。EU加盟以降の2000年代に激増したEU諸国への出稼ぎ労働者の姿も、2014年EU文学賞受賞作品。




カーリス・ヴェールディンシュ (Kārlis Vērdiņš, 1979-)

家族関係など現代をテーマとする詩人。『パパに捧げる歌』(Dziesma Tētim, 2007) は、「パパが家を出ていったとき、ママは夜に泣くようになった」とはじまる。小学校低学年の教科書に掲載されて、親たちの物議を醸した。




る歌』は「パパが家を出ていったとき、ママは夜に泣くようになった」と始まります。この詩は小学校低学年の教科書に掲載され、親たちの物議を醸しました。詩の中で悲しむ子どもに祖母が歌って聞かせるソ連時代のヒットソングはラトヴィアの歴史にまつわるコメディ映画のテーマ曲で、その歌を知っている者なら決まって陽気になれます。

‘94』は著者と同名の少年がメタル音楽に熱狂していく様子を、俗語をふんだんに盛り込み生き生きとつづります。90年代半ばの社会も経済も混沌とした過渡期ならではの物語です。

まとめます。1991年はラトヴィアの国ではソ連からの独立を回復した年です。1918年にできた独立国家は、ソ連に併合されていた50年間は停止状態にあったと捉えています。初期の独立国家は経済的にも民族文化的にも繁栄を謳歌したとされ、そこに寄せるラトヴィア人の郷愁と自尊心は民族の20世紀の歴史に触れる文学の通奏低音となっています。

翻訳して引用します。「ここからはなんでも見渡せた、建設途中で終わった婚姻登録所も、やっぱり未完のままの学校も(略)。大通りにはまったく同じ形のビルが三つ並んでいて、その窓のない外壁に〈労働〉、〈平和〉、〈自由〉と書いてあった。銃撃と悪党の検挙で名の知れたカフェも見えた。あの頃はどこにでもありふれた話だったけど、包囲されたカフェから銃を構えた警察官に男が連れ出されたのを、僕はここでこの目を見たんだ(略)。荒れた時代だった。イェルガワの中央刑務所を、悪名高いイワン・ハルトノフが牛耳っていた。彼はムショの中でラトヴィア語とパソコンまで覚えて、読書とスポーツにあけてくれたんだ。手下たちが刑務所の塀を乗り越えて、なにを差し入れしようと、警察にはなんの手出しもできなかった」。引用を終わります。この引用した部分は事実あったことばかりを書いています。

また、ラトヴィア人はソ連併合やシベリア追放という20世紀に被った悲劇のために、自分たちを民謡や民話のモチーフの一つである哀れな孤児に例えます。一般の読者には、自国の悲壮な歴史をたどる文学にはほとんど嫌気が差して、話題作を一度は読んだとしても二度と読み返したくないという本音もあるようです。

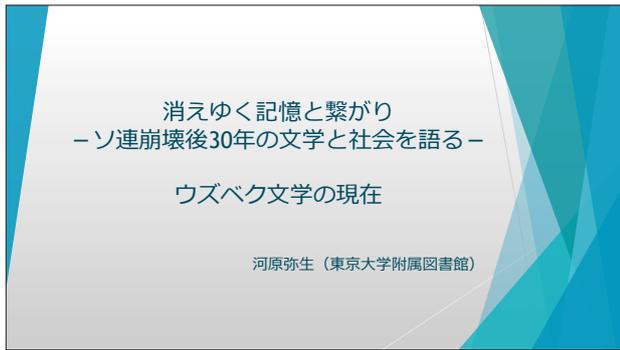
『イェルガワ ‘94』には、EU加盟以降の2000年代に激増したEU諸国への出稼ぎ労働者も登場します。この小説は著者と同世代の特に男性読者の心をつかみ、同名で映画化もされました。

とはいえ、ラトヴィアの文学ではどこまでが自伝で、どのくらいフィクションなのか判別しにくい歴史に即した自伝的な小説や、最近の傾向では偉人伝が続々と出てきています。こうしてソ連時代の記憶は消えゆくどころか、むしろ個人の心に刻まれた記憶と感情は多様なアプローチでまだまだ掘り起こされていきそうです。

詩人カーリス・ヴェールディンシュは近年の児童向けの詩で、音楽とコラボして舞台化するなど多才です。固定観念を切り崩すようなテーマには現代の家族や離婚率の高い夫婦関係などが映し出されています。例えば『パパに捧げ

他方で汎世界的で普遍性を持つテーマにもソ連時代特有の遺産の良しあしがさりげなく織り込まれていることで、地域性と民族性に立脚してノスタルジックな面白さや機知という一種のうまみを添えています。ソ連の記憶が祖父母、親の世代を通じて現代につながっていく一つの現れだといえます。

発表を終わります。ありがとうございました。
梶山 黒沢さん、ありがとうございました。続きまして、今度は中央アジアに関する報告になります。まずウズベキスタンについて、東京大学准教授の河原弥生先生です。河原先生は歴史学を専門とされていますが、『ウズベキスタンを



ウズベク語・ウズベク人・ウズベク文学



チャガタイ語 (古ウズベク語) の伝統

アリーシェール・ナヴァーイー (1441-1501)
「ウズベク文章語の確立者」

ペルシア語とのバイリンガル文化

1924年 ソ連の民族共和国境界確定
テュルク語→ウズベク語→ウズベク人
ペルシア語→タジク語→タジク人

チャガタイ文学からウズベク文学へ

知るための60章』(明石書店刊)では、ウズベク文学史についても紹介されており、今回、特別にご報告をお願いいたしました。河原先生、よろしくお願いいたします。

河原 よろしくお願ひいたします。私からはウズベク文学の現在について、特にウズベク語という言語の地位に着目しながら、ソ連時代からの変化を検討します。

まずウズベク語とウズベク文学の発展について概観しますと、ウズベク語は中央ユーラシアで広く用いられているテュルク諸語の一つです。その直接の祖先はティムール朝期に成立したチャガタイ語です。チャガタイ語は、歴史的にペルシア語が圧倒的に優位であった中でテュルク系の都市住民の言語を基盤として成立したテュルク語の文章語です。ウズベキスタンではチャガタイ語のことを「古ウズベク語」と呼んでおり、実際にチャガタイ語はアラビア文字で書かれた点を除けば、現代のウズベク語話者が比較的容易に理解できる言語です。

当時の文人を代表するのがアリーシェール・ナヴァーイーという詩人で、「ウズベク文章語の確立者」と位置付けられています。ただ、ナヴァーイーはペルシア語詩人としても有名であったように、中央アジアの文学は常にペルシア語とチャガタイ語のバイリンガリズムであって、二つの言語の掛け合いを楽しむような様式さえ一般的なものでした。

チャガタイ文学の伝統は20世紀の初頭まで続いていましたが、ロシア帝国への併合と革命を経て、テュルク語の口語はウズベク語、話者はウズベク人と命名されます。それに対しペルシア語はタジク語、話者はタジク人と命名されました。こうしてソ連時代には、チャガタイ文学はウズベク文学と呼び変えられました。

ソ連時代になりますと、ロシア文学の影響を受け、伝統的な詩文学に代わって散文作品が書かれるようになります。当時の代表的な作家としてアブドゥッラー・カーディリーが挙げられます。彼はロシア帝国末期から現地のムスリム知識人が展開した教育改革に参加し、ウズベク新文学運動の一翼を担った作家で、コーカンド・ハーン国末期のフェルガナを舞台とした歴史小説『過ぎ去りし日々』が彼の代表

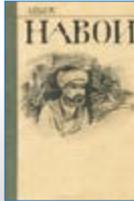
ソ連時代のウズベク文学



散文

A. カーディリー (1984-1938)
『過ぎ去りし日々』 (1926)

1957年 名誉回復
1969年 映画化



社会主義リアリズム
歴史小説

M. アイベク (1905-1968)
『ナヴァーイー』 (1944年)

作です。最初のウズベク語の小説と見なされていて、現在でも大変ファンの多い作品です。後に民族主義者として糾弾され、スターリンの大粛清の犠牲になりましたが、その後、名誉回復され、ソ連時代と独立後に2度、映画化されています。ロシア併合前の中央アジアの生活を描いていて、中央アジア各国の同時代の作家たちがこの作品に触発されたといわれています。

ソ連時代のもう一つの代表的作品が、アイベクによる歴史小説『ナヴァーイー』です。先ほど述べたティムール朝期の大詩人であるナヴァーイーの生涯を描いた作品で、社会主義リアリズムの傑作として高い評価を受けています。

ソ連邦の崩壊とウズベキスタンの独立によって、ウズベク文学界ではソ連時代に禁止されていた、粛清された作家たちの作品が読めるようになるなどの変化がありました。しかし、文体やテーマ性ではソ連時代の様式から抜け出せてはいないと評価されています。

独立後のウズベク文学の特徴的な作品として、タガイ・ムラードの小説『父から残された畑』が挙げられます。ロシアによる中央アジア侵略、植民地化とウズベキスタンの農民の苦難を描く歴史小説で、ソ連時代にはタブーであった併合という話題を扱ったもので大きな反響があり、2001年には映画化もされました。これも現在でもよく読まれている作品です。

また、これとは別の意味で独立後の特徴的なテーマとしてターヒル・マリクの小説『悪魔の住むところ』も一大ブームを巻き起こしました。ソ連崩壊後に台頭した、いわゆるロ

独立後のウズベク文学 1



タガイ・ムラード (1948-2003)

『父から残された畑』
(1993)

ロシアによる中央アジアの侵略、
ウズベキスタンの農民の苦難

「国家語」とウズベク文学

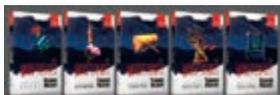
1989年10月21日
「ウズベク・ソヴィエト社会主義共和国の国家語について」

2019年10月21日
→ウズベク語の祝日

(1993年ラテン文字採用)
「シャフカト・ミルズィヤエフ大統領のウズベク語の祝日に関する国民への祝辞」
大統領府のウェブサイトより



独立後のウズベク文学 2



ターヒル・マリク (1946-2019)
『邪悪』 (1992-96)
ニュー・ウズベクを題材とする



1998年 テレビドラマ
1999年 放映禁止
2018年 解除
2020年 シーン追加で再放映

「世界文学」とウズベク文学

2018年5月

「世界文学の最高の作品をウズベク語に、ウズベク文学の傑作を外国語に翻訳および出版するシステムを改善するための措置について」

閣僚会議決定

シアのそれに対応してニュー・ウズベクと呼ばれるような地元の権力者たちを題材にしたもので、マフィアの抗争やアルコール依存症などの現代的なテーマが描かれています。1998年にテレビドラマ化されましたが、翌年、理由が明らかにされないまま放映が禁止されました。その後、現在のミルズィヤエフ大統領に代わってから2018年に禁止が解除され、2020年から新しいシーンを追加して放映されました。画面左下の人がアサドベクという名前のマフィアのボスで、生まれた子どもにアサドベクと名付ける親が続出するなど社会現象になりました。この作品のテーマは、「任侠」といえるのではないかと思います。

ところで、現在のウズベク文学について考えるなら、ウズベク語の地位の変化も焦点になります。ウズベク語は1989年に発令された「ウズベク・ソヴィエト社会主義共和国の国家語について」という法令によって国家語として定められ、ロシア語は民族間の交流のための言語として使用が保証されるにとどまりました。独立後はさらにロシア語に関する記述が削除され、ウズベク語のみが国家語として規定されました。このことはウズベキスタンの現在のナショナリズムの高揚のための役割を担っています。

2019年には国家語制定30年を記念して、大統領令により、言語法発令日である10月21日がウズベク語の祝日に指定されました。今から1週間ほど前でしたが、この3度目の祝日を大統領が祝福し、各地で祝賀行事が行われました。ちなみにミルズィヤエフ大統領はその後、今週24日の大統領選挙で再選されたばかりです。

もう一つの大きな変化は、1993年にウズベク語の表記がキリル文字からラテン文字に変更されたことです。その移行はまだ完了したとはいえませんが、ロシア語学校の数が減り、さらに外国語教育としての英語教育が重視されるようになったこともあり、少しずつロシア語の存在感が低下し、社会のウズベク化が進行しているように感じられます。

このようにしてウズベク語の地位と名声を高めるためのさまざまな取り組みが行われる中、2018年にはウズベク文学に関する閣僚会議決定が発表されました。「世界文学の最高の作品をウズベク語に、ウズベク文学の傑作を外国語に翻訳および出版するシステムを改善するための措置について」というもので、関連省庁とウズベキスタン作家同盟との協働によって世界文学をウズベク語に訳すとともに、ウズベク文学を外国語に訳して世界に広めることが目標とされました。

こうした要請を背景にして、最近では作家たち自身が海外と直接つながることを意識し始めています。特に近年の傾向として、作家自らインターネットサイトを開設する例が見られます。

一例として、フルシード・ダウラーンが挙げられます。1970年代から歴史をテーマにした作品を多く発表している詩人で「フルシード・ダウラーンの図書室」というウズベク語とロシア語のウェブサイトを運営し、ウズベク語では主に自分や他のウズベク作家の作品を紹介し、ロシア語では世界文学の翻訳を紹介しています。例えば先日の「ウズベク語の日」には「母語」について詠んだ作品を集めて投稿し

ウズベク文学の現在 1

フルシード・ダウラーン
(1952-)

『ビビ・ハヌムの物語』
(2006)
『殉教者たちの王』
(2008)

ウズベク語・ロシア語で
「フルシード・ダウラーン
の図書室」サイト運営

本人のウェブサイトより



ウズベク文学の現在 2

アザム・アービドフ (1974-)

世界の文学を英語から翻訳
近年は自ら英語で詩作

→「ウズベク文学」とは？

本人のウェブサイトより



ています。ウズベク語のサイトのタイトルがラテン文字で書かれ、本文はキリル文字で書かれているところが面白く、現在の世相を表しているように思います。

さらにここに挙げた画像はプロフィールのページです。プロフィールは英語、トルコ語、アゼルバイジャン語、カザフ語、タジク語、ウイグル語、アラビア文字のウズベク語で書かれています。最近の国家事業としての翻訳事業の一環かと思われま

す。もう一人のアザム・アービドフは翻訳に力を入れている詩人です。ウズベク語だけでなくロシア語や英語でも詩を発表しています。世界文学とウズベク文学の間の架け橋となるべく双方向の翻訳を奨励し、若い文学翻訳者のネットワークづくりなどを行っているそうです。ウェブサイトの更新も頻繁で短編詩を投稿したり、エッセーをつづったりしています。この人もプロフィールはトルコ語とスペイン語とベトナム語で書かれています。

まとめに入ります。今日のウズベキスタンにおいては、かつてのロシア語に代わりウズベク語を国家語として定着させ、ウズベク文学を海外に広めることが課題になっているようです。

一方でテレビドラマの放映を禁じたり、作品の翻訳を政府が奨励したりして、政治文化はソ連時代から大きく変容しているとはいえ、文学においてもソ連時代を掘り起こすテーマや新しい様式が現れるような刷新には至っていないように見えます。

歴史的に見ますと、ウズベク語を用いることがウズベク人

であり、ウズベク文学であるということはかなり明確であったはずですが、ウズベク文学の発展のために英語で発表するという新たな時代に入っているといえるかと思います。ウズベキスタンの場合は、他の旧ソ連諸国のように作家自身も読者もロシア語話者であるという状況とは少し違った意味で、ウズベク語でない作品はウズベク文学といえるのかという問題を考えなければいけない状況になっていると思います。私からは以上です。

梶山 河原先生、ありがとうございました。続いてカザフスタンを中心とするユーラシアの叙事詩研究をご専門とされている和光大学教授の坂井先生に、今日は同国の現代文学につながるお話をお願いしたいと思います。坂井先生、よろしく願いいたします。

坂井 よろしくお願ひします。長丁場になっていますが、少々お付き合いください。ソ連解体後 30 年ということで、私もいささか感慨深いものがあります。今日は今のウズベキスタンのお話につきまして、カザフスタンのお話を簡単にしたいと思っています。

カザフスタンは現在、カザフ人が 69%、ロシア人が 18%、ウズベク人が 3% くらいという構成になっています。都市部をはじめ、ロシア語を理解する人もまだまだ多いと思

います。ご存じのようにカザフ人は遊牧民で、遊牧文化を持っていました。ソヴィエト時代、1920～1930 年代に強制定住化が行われ、集団化が行われるプロセスでそれまでのような遊牧生活は行われなくなります。

カザフ文学とは何かというといささか難しいところがあります。カザフの人々は遊牧生活、移動生活を行っていて、記録を文字により紙で残して保存することはほとんどしませんでした。ですから、カザフ文学は本当に近代、現代のものというようになります。

ところが、文学を広い意味の言葉の芸術という形で捉えますと、カザフをはじめ遊牧文化を持っていたテュルク系のさまざまな民族の人々は非常に豊かで長い口承文芸の文化、伝統を持っていました。ここでは細かく取り上げませんが、そこに挙げたようなさまざまなジャンルは単純にただの文学というよりは集団の記憶であり、また先祖から受け継いださまざまな知恵、教訓であったともいえると思います。

近代・現代のカザフの文学をざっと見ていきたいと思ひます。まず 19 世紀までは、今、申しましたように、宮廷詩人、吟遊詩人、叙事詩語りといった人たちがいわゆる英雄物語や恋愛・ロマンスの物語などを伝えてきました。これらは口頭で行われたもので、それは 19 世紀の中ごろから文字、あるいは録音や録画という形で記録をされていきました。

消えゆく記憶と繋がり —ソ連崩壊後30年の文学と社会を語る—

カザフスタンの文学と現在

坂井弘紀（和光大学）

カザフの「文学」

- ▶ 19世紀までのジュラウ（宮廷詩人）やアクン（詩人）、ジュルシュ（叙事詩語り）
- ▶ マンバト・ウテミスル（1803-46）などのロシアにたいする反乱の詩人
- ▶ ロシアのカザフ支配を嘆いた「ザル・ザマン」（悲しみの時代）の詩人 ドラト・ババタイウル（1802-71）、シオルタンバイ・カナイウル（1818-81）、ムラト・モンケウル（1843-1906）
- ▶ **アバイ・クナンバエフ**（1845-1904）「カザフ文学の父」
- ▶ シャカリム・クダイベルディ（1858-1931）
- ▶ ウプライ・アルトゥンザリン（1841-1889）
- ▶ ミルジャクブ・ドラトフ（1885-1935）小説『不幸なジャマル』
- ▶ アフメト・バイトルスノフ（1873-1937）（カザフ文章語の整備）

カザフの口承文芸

日常生活・人生儀礼・年中行事・信仰に関わる詩歌
ことわざ・格言・なぞなぞ・早口言葉
冗談・笑い話
昔話
英雄叙事詩
恋愛叙事詩
歴史叙事詩
伝説
雄弁家の言葉
アイトゥス（詩の掛け合い）

- ▶ マグジャン・ジュマバエフ（1893-1938）
- ▶ イリヤス・ジャンスギロフ（1894-1938）
- ▶ ベイムベト・マイリン（1894-1938）
- ▶ サクン・セイフッリン（1894-1939）
- ▶ ジャンブル・ジャバエフ（1846-1945）
- ▶ ムフタル・アウエゾフ（1897-1961）長編小説『アバイの道』
- ▶ イリヤス・エセンベルリン（1915-1983）『遊牧民』
- ▶ オルジャス・スレイメノフ（1936-）『アズ・イ・ヤー』
- ▶ ムフタル・シャハノフ（1942-）
- ▶ アブディカキモフ（1953-）
- ▶ バレクベク（1969-）

今日はロシア文学会のほうでお話をさせていただいていますが、ロシアはカザフスタンと非常に長い国境を接しており、ロシアとの関係も深いです。こうしたロシア文学の中で、例えばロシアに対する反乱を起こした詩人が語った言葉やロシアのカザフ支配を嘆いた「悲しみの時代」といわれる詩人の作品が19世紀には多くつくられ、そこから次第に文学に昇華していきます。

一つ例を挙げたいのが、アバイ・クナンバエフ（1845～1904年）という人物です。「カザフ文学の父」といわれる近代文学の代表的な人物です。以降、さまざまな文学者が生まれていきます。

ソヴィエト時代になると、ここで下線を引いているように、1938年というのはスターリンの大粛清の頃で、この頃にそれまでの伝統的な詩人をはじめ、さまざまな文学者たちも粛清され、数多くの人々が殺されました。伝統的な、あるいはカザフの近代化の中で萌芽していた新しい文学をつくっていった人たちの流れがここでぱたっと消えてしまうような時代を経たのです。

そして戦後、例えばムフタル・アウエゾフという人物は、先ほど触れましたアバイ・クナンバエフを題材にした『アバイの道』という長編小説を書いています。ソヴィエト時代の後半になりますと、次第に自分たちの伝統的な文化に目を向けていくような作品が登場します。『遊牧民』や、あるいはオルジャス・スレイメノフの『アズ・イ・ヤー』、これは続けて言うと「アジア」となります。ここで古代テュルクの要素がスラブにどのように影響したかということを書いたり、そ

アルマトゥ市の通りの名称変更例

- ▶ レーニン通り → ドストック（友情）通り
- ▶ コミュニスト通り → アプライ・ハン通り
- ▶ ゴーリキー通り → シルクロード（絹の道）通り
- ▶ フラウダ通り → アルトゥンザリン通り
- ▶ 宇宙飛行士通り → バイトルスノフ通り

変更のない通りの名称例

- ▶ アウエゾフ通り（1961年～）、アバイ通り（1960年～）

のことで批判を受けたりするわけですが、そうした題材には遊牧文化に関係するものが多かったといえるのではないかと思います。

ソヴィエトが解体しますと、レーニン通り、コムニスト通り、ゴーリキー通りという、それまでのソヴィエト的な名前がカザフの歴史的な人物の名前や文学者、作家の名前に変更されます。ところが、先ほど言ったアウエゾフ通りやアバイ通りのように、ソヴィエト時代から変更のない通りもあります。つまりソヴィエト時代からある種の評価を受けていて、ソヴィエト時代の名称やソヴィエト的なものが変わる中でも変わらない通りの名前であり、そこからアウエゾフやアバイの位置が分かると思います。

そして、1845年生まれのアバイを記念した行事が独立以降、アバイ生誕150周年ということで1995年に大々的に行われました。これはそのとき頂いた時計です。独立後、まだ3～4年で、一種の国家行事という形で、その中でこうした文学者が顕彰されました。アバイ・クナンバエフは最近



「クナンバエフ」というロシア風の名称ではなく「クナンバイウル」という言い方をすることも少なくありません。これはそのときの150周年ドンブラという民族楽器ですね。

さて、2020年、少し中途半端な感じはしますが、アバイ生誕175周年記念がありました。現在、トカエフ大統領がカザフスタンのリーダーで、本来ですとさまざまな行事が行われる予定だったのですが、コロナの感染拡大でそのようなものは軒並みできませんでしたが、アバイの作品を日本語に訳すというプロジェクトがありました。私も関わりましたが、少し拙速な感じがして、もう少しこうすればいいのではないかというところもありました。この175周年記念は2020年に合わせて、少し急ぎ足でつくったところがあるでしょう。

カザフを代表する文学の父であるアバイは、カザフ人はこのままでは駄目だということ、学ぶとしたらアラビア語やペルシア語、それからロシア語を学ぶこと、「英知も、富も、仕事も、学問も全てロシアにある」ということを主張していました。

最後に1点だけ触れておきたいのは、ソヴィエトが解体し、独立してから、遊牧文化やそれまでの長い伝統で培っていたものが急に脚光を浴びたのではなく、既にソヴィエト時代、特にソヴィエト末期の頃には*ミラス*、遺産という運動が、今日、お話にも出てきたタタルスタンやウズベキスタン、カザフスタンというところでも現れてきていました。それらはソヴィエト時代から続いていることです。ソヴィエト時代には取り上げることができなかった歴史上の人物などが

参考文献

- ▶ 坂井弘紀『カザフ文学史概論（平成16年度言語研修カザフ語研修テキスト5）』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2004年。
- ▶ 坂井弘紀『口承文芸の世界「カザフ文学」』宇山智彦、藤本透子編著『カザフスタンを知るための60章』明石書店、2015年。
- ▶ 坂井弘紀『アバイ カラズ』『いま、世界で読まれている105冊2013 (eau bleu issue)』テン・ブックス、2013年。
- ▶ 坂井弘紀『カザフの子ども向け書籍と「伝承」』『次世代をたくむために 言語研究を幼児教育に活かす』国立民族学博物館、2008年。
- ▶ 坂井弘紀『19世紀カザフ詩人ムラトの作品と特徴』『内陸アジア史研究』18号、内陸アジア史学会、2003年。
- ▶ シノリ=ガブデン・ピセンカリ著、坂井弘紀訳『人が時代を支配する-19世紀のカザフ詩人マンベト・オテミスウルについて』『日本中央アジア学会報5号』、日本中央アジア学会、2009年。

独立以降は取り上げられるようになりました。すばっと変わったのではなく、さまざまな角度から見ていく必要もあると思います。

これで終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

梶山 坂井先生、ありがとうございました。これで第一部が終了になります。少し時間が押してしまっていて、予定の7時半までに終わるのは非常に厳しそうですが、登壇者の方々には最大8時まで延長ということでお願いしておりますので、これよりモデレーターである早稲田大学の貝澤哉先生にも加わっていただき、このまま第二部に移ってまいります。第二部の進行は貝澤先生にお任せしたいと思います。貝澤先生、よろしいでしょうか。

貝澤 ありがとうございます。早稲田大学の貝澤と申します。よろしく願いいたします。

今、7人のパネリストの方の発表をお聞きしましたが、いずれも非常に興味深く面白い内容でした。その国の内情

に詳しくないとなかなか分からない情報がふんだんに含まれていて、切り口も多岐にわたり、それぞれの地域の実情に沿った、多様なご発表だったと思います。

もちろん地域によって、文化的、歴史的なコンテキストが全く違うので、いろいろな地域の現代文学の状況を一つにまとめてしまうのは非常に乱暴な話ではありますが、今、お聞きした印象をもとに、あえてある種の方向性を考えるとすると、恐らく一つはソ連が解体していくときに、文学が新しい独立国家や民族自決のようなものを下支えし、それを可視化していく言葉として物語っていくという側面があったと思います。

これはベラルーシの場合、タタールスタンの場合、ウクライナやラトヴィアでもそうですが、要はソヴィエト時代の非常に悲惨な出来事のある種の叙事詩として物語化していくことにより「歴史」として定着させていき、生々しいトラウマのようなものを「歴史」というナラティブの形に回収することで客観的に位置づけられるようにするという機能を文学が持っていて、民族や国民の歴史を叙事詩化するという課題を担ったのだと考えられます。

ところがその一方で、パネリストの皆さんのご発表のなかには、いわばそういう国民的叙事詩のようなものから微妙な距離を取りたい、外れたい、あるいはそこの中だけで取まらないものがあるという方向性もかなり垣間見られたような気がしました。例えばウクライナのクルコフの場合、ハチを運びながら、いろいろな場所に行きますが、結局、どちら側にも行けずに灰色の状態にとどまるわけです。また、ジョージアの文学でも、アゼルバイジャンとジョージアの戦争のときに一方の捕虜になり、救出されたと思ったら、また対立する側の捕虜にもなってしまうという微妙な、ナショナルなものや国民的なもの、国民文学的なものからの微妙な距離の取り方が一つのテーマになっていました。これもやはり地域によって多少、差はあるとは思いますが、そのような方向性もあったと思います。

それからもう一つ面白かったのは、ここで取り上げられていたかなり多くの作品が実は映画化されていたり、テレビドラマになっていたり、あるいは映画の脚本家が作家として書いていたりとする種のメディア的な融合性が見えていたということです。

だいぶ時間が押しているのですが、全員に回るかどうか少し微妙ですが、私が皆さんに投げ掛けたい問いは、ここでとりあげられた各地域の文学における、過去の記憶のトラウマを歴史化していくという社会的機能のあり方についてです。それはある意味では古く、19世紀の近代文学にもともとと備わっていた「国民文学」的な機能という面があると思います。

ただ、興味深いことに、現在ではそれが、他のいろいろなメディアによって侵食されていくわけです。日本の場合はかなり明確で、文学がいわば他の新しいメディアやポップカルチャー、サブカル、ネット的な文化に取り込まれてしまい、その存在感が見えにくくなり、社会的な役割が低下しているとも思います。たとえば大河ドラマなどはもうだいぶ前から事実上現代における一種の国民的歴史叙事詩として機能していると思いますし、朝ドラやある種の国民的アニメなどが、戦争の歴史や民族的な神話を物語化する機能を担ってきたように感じます。そうしたなかで、それぞれの地域で文学がまだある種、力を持っているのでしょうか。もしかしたら他のメディアに吸収されてしまっているのかもしれませんが、逆に言うると他のメディアと手を結ぶことによって新たな文学の形ができてきているのだろうかということが気になりました。もしそうしたことについて何かおっしゃれることがあれば、少しお聞きしたいと思います。

あと、先ほどの奈倉さんのご発表の中でも言論の自由に関する問題についても質問が出ていたので、何かお考えがある方はここでご発言いただきたいと思います。いかがでしょうか。それではお1人ずつ、もし最初の発表で何か補足や言い足りなかったこと、あるいは他のパネリストの方への質問などがありましたら、それも含めて言っていたいただきたいと思います。ただ、時間がかなり押していますので、ある程度、手短かお願いできればと思います。では、守屋さんからよろしいでしょうか。

守屋 まず民族自決の下支えとしての文学という点では、例えば私が発表したヤーヒナについては、どちらかという彼女は民族の自決というよりソ連時代にあった多民族の共生に理想を掲げていると思います。逆にタタールスタンの民族主義が強い人たちからは批判されるほうです。

彼女は最初に映画スクールの脚本科を出ています。実はこの『ズレイハは目を開ける』はまず脚本として書き、それを小説の形に直した作品だと彼女は言っています。そのため、文体も非常にビジュアル的で、地の文にもせりふがどんどん入ってきて、登場人物たちがやり合う姿が生き生きと描かれている作品です。彼女がそれを書いたときには既にキャストのドリームチームが頭の中にあって、ズレイハはチュルパン・ハマトワにやってほしいという希望があったそうです。小説が非常に有名になったので、その夢がかない、チュルパン・ハマトワが主役をやったというエピソードが残っています。

メディアとの融合でいうと、さらに次の『ヴォルガの子供たち』もウチーチェリという監督が映画化の権利を持っていて、近いうちに映画化される予定だそうです。

言論の自由の問題でいうと、昔あったような国家による言論の統制というより、今はネットによる個人からの批判がダイレクトに飛んで来る、非常に厳しい時代だと思います。『ズレイハは目を開ける』が発表されたときも、タタール人女性がどんどん目覚めて現代的になっていくと保守的な人から批判を非常に浴びましたが、それこそ、昔だったら特定の人何らかの誌面上である秩序を持って批判したでしょうが、今ではあらゆる人がSNSなどに批判をダイレクトに書き込みます。小説の評価も、それこそロシア語版アマゾンといえるOZONというところで、個人がどんどん批判をしってくるわけです。

1作目と2作目はそうではありませんでしたが、今年出た3作目の『サマルカンド行き疎開列車』には、驚くほどたくさんの反対意見の人が最初に星一つを付けました。「ヤーヒナの作品は全然駄目だ」、「タタールスタンの良さが全然分かっていない」、「史実と違う」などと、これがヤーヒナの作品かと思うほどひどい評価を最初の2〜3カ月に受けました。しかもこの人は本を読んでいるのかと思うようなひどい批判もたくさんあり、私まで心を痛めました。最近になって、その評価の星は肯定的に戻って来ていますが…。ですので、最近の言論の自由は、国家によるものだけではなく、個人からのSNSなどの攻撃も作家の判断に影響を与えるのではと危惧しています。

実はもう一つ、チュルパン・ハマトワも『ズレイハは目を開ける』のズレイハを演じて、ひどい批判にさらされました。本来のズレイハはタタール語しか話せないのに、チュルパン・ハマトワがタタール語を話せなかったからです。「自分がタタール語を話すとしてもなまってしまって、おかしくなるから、もう一切、話さないことにした」と完璧に無口なズレイハを演じましたが、タタール文化を守ろうとする人たちから非常に厳しい批判を受けました。ハマトワは「私が訛って話すことによって、ドラマを滑稽にはしなくなかった。だから、タタール語はしゃべりませんでした。皆さん、分かると思いますが、私はソビエト時代に育ったタタール人です」と弁解していました。

貝澤 ありがとうございます。とても面白かったです。やはりSNS、ネットの存在が、芸能人だけではなく作家の領域にもかなり影響を及ぼしているということですね。ありがとうございます。

では、越野さんもよろしくお願ひいたします。

越野 ありがとうございます。貝澤先生がおっしゃったソ連解体後の文学の二つの流れは、ベラルーシの場合でも確かに当てはまる場所があると思いました。

アレクシエーヴィチの文学がまさにそうです。貝澤先生も

少し触れられたと思いますが、戦争やさまざまなカストロフィーの記憶やトラウマを描くというのは、文学が昔から伝統的に行ってきたことです。ソ連時代の文学もまさにそのような機能を果たしていました。ベラルーシは特にそれが顕著で、独ソ戦争（いわゆる大祖国戦争）は20世紀のベラルーシ文学が扱うテーマの中でかなり大きな位置を占めていました。ソ連時代の文学がすでに戦争の記憶とどう向かい合うかを国民に示す役割を果たしていたわけですが、アレクシエーヴィチはソ連文学の伝統の上に立ちながら、しかしソ連時代には書けなかったような部分を引き受けたということもできます。

今日、ご紹介したその他の作家たちは、そういう意味では伝統的な文学の役割から少し距離を取った人たちだったと思います。ベラルーシの場合、ベラルーシ語の読者が非常に限られていることもあり、そもそも国民文化、国民文学をつくっていく上でベラルーシ語の文学が果たす役割はかなり限られたものだと思います。ベラルーシ語の現代文学は、むしろ逆に貝澤先生がおっしゃっていたようなサブカルチャーに近いところがあります。そもそも現代では、どんな地域においても文学作品の愛好者というのはマイノリティですが、ベラルーシでは文学に限らず、ベラルーシ語を話しベラルーシ文化を好む人たちもマイノリティです。しかしマイナーな嗜好であるがゆえに信奉者には強力な磁力を生み出すという点で、サブカルチャーとしてのベラルーシの文学が果たしている役割があるのではないかと思います。

奈倉さんが提起された言論の自由に関しては、最近、沼野恭子先生のオンラインでの研究会でアレクシエーヴィチ本人が登場して、ベラルーシの現状を率直に語っていただきました。雑誌『文藝』（2021年冬季号）に掲載されていますので、それをぜひご覧ください。ベラルーシは今、かなり極端な状況です。作家や知識人の多くが国内にいらなくなっていきます。今日紹介したマルツィノーヴィチはあえてベラルーシに残っているようですが、バハレヴィチは反対運動に積極的に参加した結果、最近国外に脱出したはずですが。

それから、奈倉さんがアレクシエーヴィチの『チェルノブイリの祈り』のザブジュコによる新しい翻訳について紹介してくださり、ありがとうございます。私がザブジュコの批評を極端なウクライナ語ナショナリストのような形で描き出してしまったことは少し言い過ぎだったと思います。ウクライナの作家がアレクシエーヴィチの小説を読むことによってベラルーシの言語状況を批判するというよりは、むしろウクライナにおけるウクライナ語の位置に対する不安のようなものを吐露していると考えたほうが良いと思います。

チェルノブイリ事故に関するウクライナ側の文学や言論を

見ていくと、もちろん環境汚染の問題は非常に深刻ですが、それと同時に言語汚染の問題が重視されています。もともとチェルノブイリ原発がつくられたポーシェ（ポーシェ）は、ウクライナとベラルーシの境界地域で、民族文化が豊かな場所でした。しかし、そこに原発がつくられ、ソ連全土から労働者（多くはロシア語話者）が流入することにより言語環境が大きく変えられたことが強く意識されてきました。そのような言語状況の人工的な変化と環境汚染の問題が重ねて論じられたのがウクライナ側の特徴です。それに対して、ベラルーシ側は原発自体が国内になかったこともあります。環境汚染と言語問題を並べて問題化する意識がウクライナに比べると薄いといえます。アレクシエーヴィチとザブジュコの翻訳をめぐる応答には、このような意識のずれ違いが映し出されているように思います。ありがとうございました。以上です。

貝澤 どうもありがとうございます。今のベラルーシ語が実はもうサブカル化しているということが分かり、目からうろこが落ちた感じです。ありがとうございます。

では、奈倉さんのほうで何かありますでしょうか。お願いします。

奈倉 どうもありがとうございます。まずメディアと文学の関わり方については、クルコフ自身、90年代には主に脚本を書き、他にもテレビや映画を念頭にしていました。各作品はもちろんウクライナにもたくさんありますが、そこでまたウクライナ語で書くか、ロシア語で書くかと言語が問題になってきます。ウクライナのオーディエンスを想定するか、それともロシアかということです。

2番目の質問にも関わってきますが、言論の統制、自由、不自由について、ウクライナは非常に特殊な問題を抱えています。憲法では言論の自由を保障しているものの、いわゆる脱共産主義法と呼ばれる言論規制が存在するのです。ホロドモール（人為的飢餓）の否定を禁止。要するに「ホロドモールはなかった」と言えないということです。それに加えて共産主義とナチズムの賛美の禁止という、この三つの禁止があります。ホロドモールとナチズムに挟んで真ん中に共産主義を持っていくという禁止の仕方は、ベラルーシなどと比べるとその差が非常に明らかになってきます。ベラルーシは例えばソ連時代の再評価がされていたり、スターリンの再評価がされていたりという面があります。これはどちらがいい、どちらにするべきだという問題ではありません。ロシアにもそういったソ連回帰の現象はもちろんありますが、すぐ隣の国との認識の差が、書いていいことと悪いことの差が開いていくことに対し、とりわけ文学とメディアが結び付くような場面で特に問題となってきます。二つとも合わせて大変

大事な問題だなと思いつつ、ずっと見ています。短いですが、ありがとうございます。

貝澤 ありがとうございます。今、おっしゃった脱共産主義法やナチズムの賛美を禁止するというのは、検閲官のような者がいて、具体的に「これが駄目だ」などと指示をするという形なのでしょうか。それとも、もっと漠然と裁判で決めるなど、どういう形ですか。

奈倉 先ほどの守屋さんのお話にも少し近いのですが、一番身近に感じられる不安としては、やはり世論があります。それが法律であるという時点で、それを常に意識しなければいけません。ソ連時代の検閲とはだいぶ趣が異なっていますが、ひょっとしたらそういうところに一番、問題があるのではないかと思っています。

貝澤 そうですね。法律があることにより、SNSなども含めた社会的なものの圧力が高くなり、自主規制のようなことが起こってしまうのですね。

奈倉 はい。

貝澤 ありがとうございます。今日の社会の中でわれわれ日本でもSNSの問題は大きな問題になりつつあるので、他人事とは言えない面があります。

それでは五月女さん、よろしくお願ひします。

五月女 まずソ連解体の前後、ジョージアは民族主義が力を持ってきます。ソ連時代からもありますが、その際に19世紀後半の民族主義的な作家が一つの参照点になり、それが今日まで続いています。

その19世紀後半の作家たちは、言語、土地、信仰という三つがジョージア人にとって重要であると考えていて、ソ連崩壊以降も民族主義者たちはこれをスローガンの使っているもので、ジョージアにおいて、文学は民族意識を形成する上でずっと力を持ってきたものだと思います。

ソ連以前からの伝統だと思いますが、文学にそういう役割がある中で、作家や詩人は社会において非常に尊敬の対象であり、崇拜の対象としてあります。今回、紹介した作家についても、作家専業としてやっているわけではなく、例えば他のテレビ番組に出るなどしています。

2人紹介したうち、最初のアカ・モルチラゼはそこまで出ているわけではありませんが、最近だと、ドイツのフランクフルトなどのブックフェアに行き対談したり、それをテレビで放送したりしています。それ以上に2人目のトゥラシヴィリという人はかなりアクティブに参加していて、2年前のラグビーのワールドカップのときには自分のファンを連れて日本にやってくるなど、いろいろな方面に手を出そうとしている人です。

そういう傾向は他の国でも多分そうだと思いますが、現代のジョージアの作家においてもいろいろあります。最近、

ジョージアでも映画産業が復活してきた印象があり、先ほど貝澤先生もおっしゃっていましたように、映画の原作や舞台などいろいろなメディアの融合という傾向はジョージアでももちろんあると思います。

最後に言論の自由については、先ほど奈倉さんが世界報道自由度ランキングに触れたとき、ジョージアは上のほうにいたと思います。ジョージアは結構、自由の国というか、自由しかないようなところで、みんな、好き勝手にやっては混乱しています。「船頭多くして船山に上る」というところがあるので、言論の自由については結構あるとは思いますが、どうしても狭い国、狭い社会で、知り合いの知り合いは知り合いというところがあるので、国外政治や大きな問題に関しては作家が何か作品に表したり、直接、テレビや SNS で書いたりするかもしれませんが、かえって国内政治のような問題に関しては表立って書くことはためらわれるという面があると思います。以上になります。

貝澤 ありがとうございます。なるほど。ジョージアの場合、作家がある種、バラエティーに出るような「文化人」になることで、いろいろなメディアで活躍しているのですね。しかし、そこにはやはりある種の政治的な自主規制や圧力のようなものも多少感じられるところがあるわけですか。

五月女 そうですね。

貝澤 どうもありがとうございました。では、黒沢さん、よろしくお願ひいたします。

黒沢 ラトヴィアも、今、お聞きしたジョージアとやや傾向が似ていると思います。文学のメディア化という点でいえば、先ほど取り上げた話題作、『ソビエト・ミルク』や『イェルガワ '94』という作品はどちらも映画化されています。また、他の作品も舞台化されたり、音楽とのコラボで CD をつくったり、人気のある歌手に曲を歌わせたりしています。

舞台化の面でいえば、ラトヴィア語の作品であってもそれをロシア語にも翻訳し、ロシア語と 2 言語で舞台化することもあります。特に子ども向けの絵本の舞台化の場合は必ずロシア語の観衆も意識して、ほとんどロシア語でも演じられています。

また、もう亡くなった古い作家の作品であっても、特に詩人の作品はオーディオブックで、朗読して売られるようなメディア化が盛んです。有名な俳優に朗読させたウェブサイトもたくさん見られます。

作家自体がもともとはアニメーション映画の監督で、そこから作品を逆に文章にして、本にしたという人もいます。

言論の自由についてはそれほど政治に付度する感じはなく、特に言いたいことを制限されることはないと思います。どちらかといえば、政治家の言葉よりも作家の発言のほうが信頼

されている面が強いので、特に何か問題があったときには作家が発言することが注目されます。

先ほどの発表の中で、奈倉さんの灰色というお話が面白いと思いました。ラトヴィアでは、灰色はもちろん地味な色ではありませんが、バルト海を灰色に例えています。バルト海は晴れている日以外、本当に灰色です。ラトヴィアの民族の色は灰色で、灰色がなければ他の色が映えないととても肯定的に捉えています。黒でもない、白でもない灰色を選択してきた民族性なのかなということも。ありがとうございます。

貝澤 ありがとうございます。ラトヴィアの場合、先ほどのお話でも、実はもともと合唱などで詩を歌っていて、元来文学は単に活字的なものではなくオーラルな形で伝わっているものなので、それがオーディオブックなど、他のいろいろなメディアに変わっていくというラトヴィア独自の文化がある気がしました。どうもありがとうございました。

では、河原さん、よろしくお願ひいたします。

河原 まず「文学が民族自決などの面で社会的な役割を担っているか」ということですが、私が話した中にも出てきたように、歴史的な英雄をたたえたり、植民地期には英雄ではなくても辛抱強い民衆の苦難の歴史をたたえたり、そういう意味で民族のアイデンティティの確認には大きな役割を果たしているといえるのではないかと思います。そして、それが社会や人々にも受け入れられていると見ることができると思います。

しかし、同時にそうしたことに強く束縛されている面があります。実際に、検閲はソ連崩壊後も長らくなされてきましたし、先ほど言論の自由のランキングではワーストを争っていました。そのような状況ですので、直近のことや現在のこと、つまりソ連時代のことや現在の独立後のことを自由に語るにはまだ慎重なのではないかという気がします。

5 年前、2016 年に今の大統領になってから、公には検閲が廃止されていますが、よくいわれるのが自己検閲をするということです。大変慎重な態度を取らざるを得ないような歴史を歩んできているということでしょう。

小説についてはそのような印象を抱いていますが、一方でウズベク文学やペルシア文学の長い伝統の中では、散文ではなく詩文学のほうが中心で、現在においても詩が好まれます。そのような意味で、どうしても古典回帰という現象がうかがえるのではないかと思います。小学校の教科書の母語でもやはり基本は詩ですし、図書館で開催される「文学の夕べ」のような会でもやはり読まれるのは古典詩が多いようです。

メディアについても、検閲の結果については先ほども上映禁止というところでお話ししましたが、全体として、文学作

品であってもメディアであっても同様なのではないかと感じています。

貝澤 どうもありがとうございました。先ほどお伺いした話でも、ウズベキスタンでは国家語を制定して、いわばウズベク語に全部、統一してしまうなど、割と古いタイプの国民文学化のようなことが起こっているのだなと思いました。どうもありがとうございました。

では、坂井さん、よろしく願いいたします。

坂井 まず遊牧文化の華やかな時代、先ほど申しましたように彼らの文学は口承のもので、特に英雄叙事詩などが好まれて、そういうところにある種の民族意識やアイデンティティを求めることがあると思います。ですから、近代・現代の文学がそういう役割を果たしたというよりは、いわゆる伝統的な口承文芸がその役割を担っていることが多いと思います。

メディア等の話では、今、お話ししたように、例えば映画やアニメなどでも英雄叙事詩を題材にしています。先ほどオーディオブックの話が出ましたが、英雄叙事詩を吹き込んだCD付きの絵本を売っています。

では、文学はどうかというと、例えば本屋さんに行きますと、活字離れがあるとはいえ、立派な本屋が都市にはあり、そこで売っているものは例えば海外のものや翻訳したロシア語、少ないですがカザフ語翻訳の海外の小説、ロシアの小説などが並びます。ローカルなものでは立派な装丁にした英雄叙事詩や口承文芸を基にしたものが多いように思われます。国の政策で「祖先の言葉」という口承文芸のさまざまなジャンルの100巻もののシリーズがあり、そういうものが並んでいます。

先ほど河原さんもおっしゃっていたように、もともと散文より韻文の世界で、そういう伝統や歴史を持ちます。古典回帰という言葉が先ほどありましたが、その点ではカザフスタンも同様です。

また言論の自由という点では、先ほどアバイが昨年、出版したものを少しお見せしましたが、冒頭にトカエフ大統領の言葉がある形で、こうした文学の分野においても、あるいは先ほど言った100巻シリーズの口承文芸の書籍にしても国の指導、主導でかなりコミットしていると感じるところがあり

ます。以上です。

貝澤 ありがとうございます。口承文芸が力を持っていて、近代以前のより深い文化の層のほうが強いということですね。基本的に近代以前の口承文芸はやはりそれ自体がある種、国家の成り立ちや権力を描いていくパブリックなものなので、それがむしろ近代を通過して逆に機能するようになってしまったという非常に面白い例だと思いました。どうもありがとうございました。

時間がかかり迫ってきていますが、せっかくですので、お集まりの聴衆の皆さんの中からもぜひひとつも質問したいことがありますら手短にお願ひできればと思いますが、いかがでしょうか。リアクションの「手を挙げる」を押していただくか、もしくはミュートを外して発言していただいても構いません。いかがでしょうか。大丈夫でしょうか。

では、もし何かパネリストの方々で言い足りないことがなければ、司会のほうにお返してよろしいですか。梶山さん、よろしく願いいたします。

梶山 では、時間も押していますので、これで終了したいと思います。皆さん、長時間にわたって興味深いお話をありがとうございました。

本日のシンポジウムは明日、明後日と開催されます「日本ロシア文学会 第71回 全国大会 筑波大学・オンライン大会」のプレシンポジウムとなっています。全国大会のほうはまだ参加登録が可能ですので、ご関心のある方はぜひ日本ロシア文学会のウェブサイトよりご登録ください。

また今日のプレシンポジウムの模様はYouTube上で1か月ほど見られるようにしておきます。途中から視聴された方、もう一度見直したい方などは、どうぞ録画をご覧ください。その後、本シンポジウムは文字起こしをし、報告書としてまとめて刊行する予定です。こちらのほうもどうぞよろしくお願ひいたします。刊行した冊子は日本ロシア文学会のウェブサイト等で見られるようにしたいと思います。

以上をもちまして、日本ロシア文学会プレシンポジウム「消えゆく記憶と繋がりーソ連崩壊後30年の文学と社会を語るー」を終了いたします。登壇者の皆さま、また最後までご覧いただきました聴講者の皆さま、どうもありがとうございました。

本プレシンポジウムは、日本ロシア文学会 第71回全国大会 筑波大学・オンライン大会 プレシンポジウム「消えゆく記憶と繋がりーソ連崩壊後30年の文学と社会を語るー」として2021年10月29日(金)に開催された。

イメージ、写真等で著作権があるものの著作権はそれぞれの著作権所有者に帰属します。

日本ロシア文学会 第71回全国大会 筑波大学・オンライン大会

主催：日本ロシア文学会

共催：筑波大学 人文社会系（日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト (NipCA)）

プレシンポジウム

消えゆく記憶と繋がり

—ソ連崩壊後30年の 文学と社会を語る—

2021年10月29日(金)17:30~19:30

第一部 各国の最新文学事情報告 第二部 全体討論

モデレーター：貝澤 哉（早稲田大学教授）

報告・討論者：

タタールスタン(ロシア) 守屋 愛（慶應義塾大学非常勤講師）

ベラルーシ 越野 剛（慶應義塾大学准教授）

ウクライナ 奈倉 有里（早稲田大学非常勤講師）

ジョージア 五月女 颯（京都大学、日本学術振興会特別研究員PD）

ラトヴィア 黒沢 歩（ラトヴィア文学翻訳家）

ウズベキスタン 河原 弥生（東京大学准教授）

カザフスタン 坂井 弘紀（和光大学教授）

司会：梶山 祐治（筑波大学UIA）

ロシア文学会会員の方

※右記QRコードから事前登録をお願いします。ご登録後Zoom meetingへ入室するためのURLが自動送信されます。



非会員(一般)の方

※事前登録は不要です。
右記QRコードまたは下記URLから
YouTubeの同時配信をご覧ください。
<https://youtu.be/vF8xC-CpVVI>



協力：日本・中央アジア友好協会(JACAFA)、筑波大学 国際局、学生部、グローバルコミュニケーション教育センター社会貢献委員会、スーパーグローバル大学事業推進室、グローバルリーダーシップ教育プログラム、人文社会科学研究群、人文・文化学群、社会・国際学群



[問合せ]
筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト (NipCA)」
TEL: 029-853-4251 / Email: info@genis.jinsha.tsukuba.ac.jp
Website: <https://centralasia.jinsha.tsukuba.ac.jp>

日本ロシア文学会 第71回全国大会 筑波大学・オンライン大会 (2021年10月)

プレシンポジウム

消えゆく記憶と繋がり

—ソ連崩壊後30年の文学と社会を語る—

2025年3月21日初版発行

監 修 臼山 利信

編 集 梶山 祐治 (主担当)、徳田由佳子 (副担当)、谷越 祥子、太田 涼子

発 行 者 臼山 利信

発 行 所 筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト (NipCA)」

茨城県つくば市天王台 1-1-1

Tel: 029-853-4251

E-mail: info@genis.jinsha.tsukuba.ac.jp

Web: <https://centralasia.jinsha.tsukuba.ac.jp>

印刷・製本 メディア情報株式会社



筑波大学
University of Tsukuba

筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト
(NipCA)」

〒305-8571 茨城県つくば市天王台 1-1-1 筑波大学

Tel. 029-853-4251

E-mail: info@genis.jinsha.tsukuba.ac.jp

Web: <https://centralasia.jinsha.tsukuba.ac.jp/>
